新潟県埋蔵文化財調査報告書第43

関越自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

長表（ながおもて）遺跡

1986

新潟県教育委員会

関越自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

長表遺跡

1986

新潟県教育委員会

序

魚野川流域にある南魚沼地方は、遺跡・遺物をはじめ古い時代の文化財が数多くあり、先人達によって調査・研究されてきた地域でもある。今回の調査の対象地となった六日町は古くから南魚沼地方の政治・文化の中心地として知られ、昭和36年温泉の湧出により一大転期をむかえ、第二次・第三次産業が急速に伸びている。交通面では上越新幹線が昭和57年に、関越自動車道が昭和60年に開通し、関東文化圏との最短距離に位置している。この２本の高速交通幹線の開通によって、南魚沼地方を含む新潟県は高速時代を迎え、その恩恵を享受している。

本書は新潟県が関越自動車道の建設に伴って日本道路公団から委託を受けて実施した発掘調査の記録である。

この調査によって、魚野川流域における弥生文化の一端が明らかになり、弥生時代中期後半には当地方も長野県の千曲川流域に発達した文化の範疇に包括されていることが判明した。本県の弥生文化については、まだ不鮮明な所が多く、今後追求して行くべき問題点を数多くかかえている。本調査の成果が今後の考古学的研究に一つの方向が得られたとすれば、意義深いものがあり、本書が広く研究の一助となればと願うものである。

なお、本調査に際し、多大なる御協力・御援助を賜わった六日町教育委員会並びに町民の方々、また、計画から発掘調査に至るまで、格別の御配慮を賜わった日本道路公団に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第である。

昭和61年３月

新潟県教育委員会

教育長　有　磯　邦　男

例　　言

1．本報告書は新潟県南魚沼郡六日町小栗山に所在していた長表遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は関越自動車道の建設に伴ない、新潟県が昭和58年・59年度に日本道路公団新潟建設局から受託したものである。

2．本遺跡の発掘調査は新潟県教育委員会が調査主体となり、昭和58年７月４日から８月３日までと昭和59年４月16日から５月23日までの２期に分けて実施した。

3．遺物の整理・復元作業は昭和60年度に実施し、県教育庁文化行政課埋蔵文化財係の職員があたった。

4．発掘調査に伴う出土遺物の注記は遺跡名の「長表」からNGとし、グリッド名・遺構名を併記した。

5．発掘調査による出土遺物は一括して県教育委員会が保管・管理している。

6．遺構・遺物の実測・写真撮影及び挿図等の作成は戸根与八郎・山本　肇・田辺早苗があたった。

7．報告をするにあたり、遺物には通し番号を付し、実測図番号と写真番号は一致している。記述にあたっては実測図を主とし、写真は補足的に利用した。

8．本文の記述に際し、出土地点が明記されていない遺物は全て自然の河川跡から出土したものである。

9．本報告書は分担執筆したもので、Ⅱ－１が柳　恒雄、Ⅵ－１が田辺早苗、Ⅵ－３・４、Ⅶ－３が山本　肇、他は戸根与八郎が執筆した。

10．発掘調査にあたり、参加者ならびに六日町教育委員会や日本道路公団新潟建設局六日町工事事務所から種々の協力や御配慮を賜わった。

11．本報告書の作成にあたり下記の諸氏から御教示を賜わった。また、本文中に出てくる諸氏各位の氏名については敬称を略させて頂いた。

池田　亨、金子拓男、唐沢至朗、小林一郎、小林達雄、佐藤雅一、関　雅之、田中真吾、細矢菊治、松永靖夫、丸山謙司、山田昌久　（五十音順　敬称略）

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の環境 …… 2

1．地理的環境と遺跡の立地 …… 2
2．周辺の遺跡 …… 4

Ⅲ　調査の経過 …… 7

1．昭和58年度の調査 …… 7
2．昭和59年度の調査 …… 7

Ⅳ　調査の概要 …… 8

1．調査地区の設定 …… 8
2．層序と遺構・遺物 …… 9

Ⅴ　遺　　構 …… 11

1．大型溝状遺構 …… 11
2．土　壙 …… 11
3．ピット …… 11
4．畝状遺構 …… 11

Ⅵ　遺　　物 …… 12

1．縄文時代の遺物 …… 12
2．弥生時代の遺物 …… 14
3．古墳時代の遺物 …… 18
4．平安時代の遺物 …… 18
5．中世の遺物 …… 22
6．近世の遺物 …… 22

Ⅶ　総　　括 …… 23

1．魚沼地方の弥生遺跡について …… 23

2．　本遺跡出土の弥生土器について　……24
3．　新潟県の和鏡について　……25
4．　まとめ　……28

図 版 目 次

図版 1　大型溝状遺構・畝状遺構(南から)、畝状遺構（西から）
図版 2　58年度調査大型溝状遺構内出土の自然木（東から)、58年度調査大型溝状遺構内出土の自然木（南から）
図版 3　59年度調査大型溝状遺構内出土の自然木（東から)、59年度調査大型溝状遺構内出土の自然木（西から）
図版 4　土壙および溝状遺構土層断面
図版 5　発掘状況、土層断面
図版 6　出土遺物（縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器）
図版 7　出土遺物（縄文土器・弥生土器）
図版 8　出土遺物（弥生土器）
図版 9　出土遺物（弥生土器・須恵器）
図版10　出土遺物（須恵器・中世陶磁器他）

挿 図 目 次

第 1 図　遺跡周辺の地形 …… 3
第 2 図　周辺の遺跡分布 …… 3
第 3 図　北沖遺跡出土品 …… 5
第 4 図　飯綱山Ⅰ遺跡出土品 …… 5
第 5 図　遺構全測図 …… 6
第 6 図　グリッド設定図 …… 8
第 7 図　大型溝状遺構実測図 …… 10
第 8 図　大型溝状遺構土層断面図 …… 折込み
第 9 図　土壙実測図 …… 11
第10図　出土遺物（縄文土器・弥生土器） …… 13
第11図　出土遺物（弥生土器） …… 15
第12図　出土遺物（弥生土器ほか） …… 16
第13図　出土遺物（弥生土器） …… 17
第14図　出土遺物（須恵器・土師器ほか） …… 19
第15図　出土遺物（土師器・中近世陶磁器） …… 20
第16図　出土遺物（木製品・石製品） …… 21
第17図　出土遺物（和鏡） …… 22

第18図　出土遺物（銭貨）……22

表　目　次

表１　魚沼地方の弥生遺跡……23
表２　新潟県内和鏡出土地名表……26

Ⅰ　調査に至る経過

関越自動車道は新潟から群馬・埼玉の両県を経て東京と結ぶ延長299kmの高速道路で、昭和41年１月に湯沢～長岡間の基本計画が策定され、昭和46年６月に工事施行命令が出された。昭和46年県教育委員会（以下県教委とする）は日本道路公団（以下公団とする）から遺跡分布調査の依頼を受けた。県教委は地元の研究者に遺跡の分布調査を依頼し、六日町管内で18遺跡存在することが判明した。昭和47年になると県教委は公団から通過予定地について幅２kmで分布調査依頼があった。県教委は分布調査を実施し、六日町管内では８遺跡（飯綱山古墳群・蟻子山古墳群・欠ノ上カヤ場遺跡・金屋遺跡・小栗山遺跡・北沖遺跡・猪の尻経塚・北沖塚）が確認されたに過ぎず、長表遺跡はまだ未確認であった。この段階で県指定史跡である飯綱山古墳群と蟻子山古墳群の取扱いについて協議を行い、両古墳群については法線には直接かけないものの、飯綱山古墳群についてはトンネル工法で工事を実施することで協議が成立した。

その後、道路法線が発表され、幅杭が打たれると、県教委は昭和50年９月に小出～湯沢間の遺跡分布調査を実施した。六日町地内ではすでに金屋遺跡が法線内にかかることが判明していた。また、昭和49年に農業基盤整備事業に伴って偶然発見され、発掘調査が行われた長表遺跡が法線に近接して存在することが判明した。長表遺跡の伸びが法線内にまで広がっている可能性が多分にあり、水田の畦部上は土師器の細片が散発的に見られることなどから、試掘調査を実施して遺跡か否か検討する必要があると判断し、県教委は公団にこの事について通知した。

昭和55年10月に公団から調査対象地内にトンネル工事に伴う諸設備（資材置場・機械室・電気室・土砂搬出用軌道など）が必要で、ある程度の面積が必要であるとの申出が県教委にあった。12月３日県教委は遺跡の範囲・遺物包含層の有無等を確認するために試掘調査を実施した。試掘調査の結果、平均深度は80cmで地山面に達し、部分的に削平されたり、盛土され、遺物包含層は部分的にしか存在していない。また、黒色土の詰まった幅7.8m、深さ1.5mの溝状遺構が西側から東側に向って存在していることが判明した。溝状遺構の内面には流木片がびっしりと詰まり、中から須恵器の甕等が出土した。この調査で対象面積は4400㎡と確定した。

県教委は試掘調査はしたものの、調査スケジュールがつまっていたため工事着工前に発掘調査を実施することは不可能であった。このため、諸設備の建設に必要な面積の大半については埋立をして使用し、トンネル工事が完了した時点で発掘調査を実施することになった。昭和57年度には六日町～湯沢間の供用が59年度に決まり、昭和58年３月県教委と公団は最終的調整を行った。トンネル工事等のからみから発掘調査は２年次に別けて実施せざるを得なかった。昭和58年度は調査対象地の西側（電気室を含む1843㎡）を、昭和59年度は東側（2567㎡）を調査することになった。昭和58年度は７月４日から８月３日まで、昭和59年度は４月16日から５月末日までという予定で発掘調査を計画し、実行に移した。

Ⅱ 遺跡の環境

1. 地理的環境と遺跡の立地（第1・2図）

本遺跡は、いわゆる六日町盆地の中に位置する。

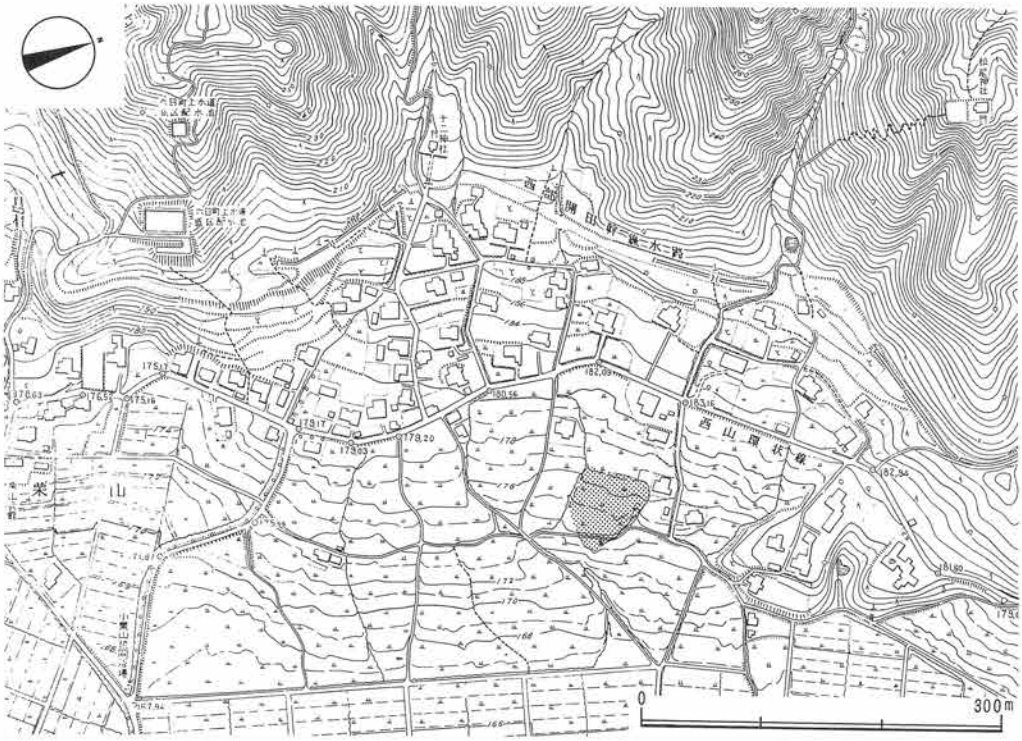
六日町盆地は、北北東－南南西方向の新発田・小出地形地質構造線（山下、1970）上に位置し、魚野川、破間川の流路に沿ってほぼ舟底形に発達する。なお、この構造線は盆地の東西両側の地形を明瞭に区分している。以下に、破間川との合流点以南の六日町盆地について述べる。

盆地の西側は、主に下部洪積統の魚沼層群および新第三紀鮮新統からなる魚沼山地と接する。その境界は、前述の構造線を反映し、直線状である。北から、栃原峠（標高320m、以下「標高」略）、笠置山（678m）、中将岳（680m）、桝形山（748.5m）、当間山（1016.5m）の山々を北北東－南南西方向の稜線上にもつ小起伏山地であり、同方向に流れる魚野川と信濃川によって東西を限られる。その稜線は、山地全体の東部に偏っており、盆地に面する山地東側斜面は、信濃川に面する山地西側斜面よりも短かい。つまり、非対称地形をなしている。

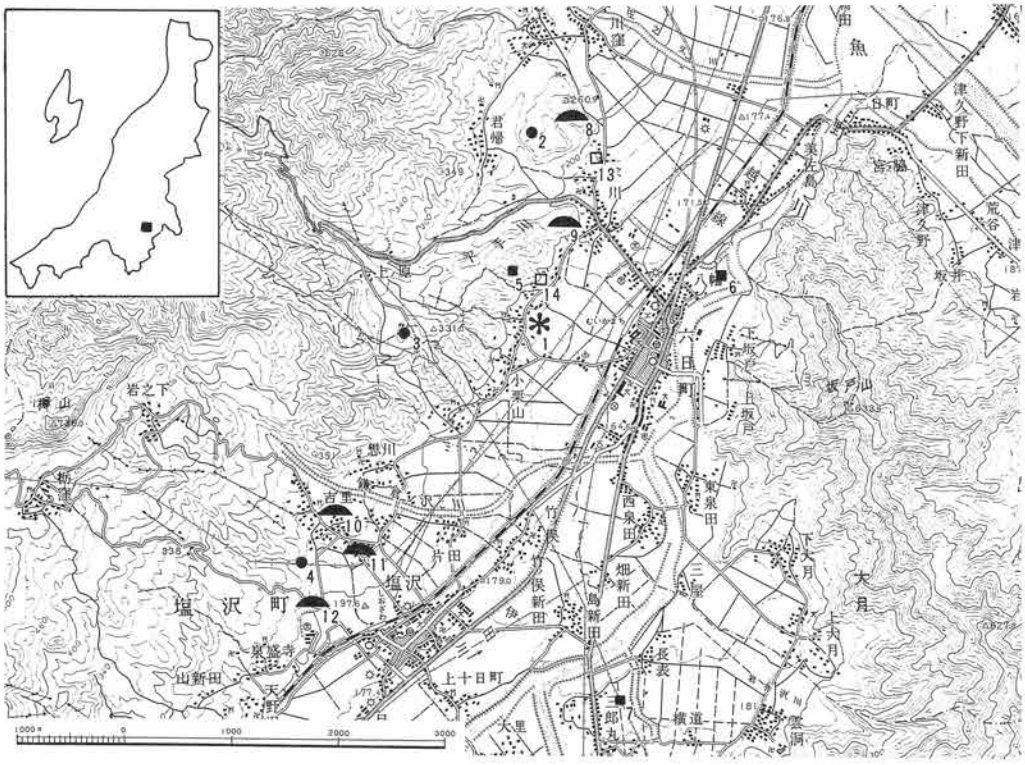
盆地の東側は、主に古生界、新第三紀中新統および花崗岩類などからなる三国山脈と接する。これは、群馬県境の山々に源を発する水無川、三国川、登川などによって、笠倉山山地、越後三山を含めた八海山山地、巻機山から連なる金城山山地に分けられる（鈴木、1978）。盆地との境界も、これらの河川によって出入りが著しい。北から、笠倉山（907.2m）、駒ヶ岳（2002.7m）、八海山（1720m）、中ノ岳（2085.2m）、丹後山（1808.6m）、金城山（1367.0m）、巻機山（1967m）などが連なる中・大起伏山地である。

盆地の中央には魚野川が流れる。この東側山地からは、前述の佐梨川、大池川、水無川、田川、宇田沢川、三国川、岩井沢川、登川などの比較的規模の大きい支流が合流するが、西側山地から合流する赤沢川、天神川、名木沢川、押堀川、四十日川、庄之又川、平手川（平手出近尾川）、鎌倉沢川、仁田川、大野川などの支流は規模が小さい。それぞれの河川には、その規模にあった扇状地が複合して発達する。佐梨川と水無川の扇端部、三国川と登川の扇央部に、開析され段丘化したところがあるが、100m以上の沖積層の堆積（新潟県商工労働部企業振興課、1970）とこの複合扇状地は、相対的な沈降運動の結果といえる。本遺跡の背後に発達する上の原の台地以外にはほとんど洪積世段丘がみられないことも、このことを裏づける。

本遺跡は、魚野川左岸、六日町駅の西約1km、平手川扇状地と鎌倉沢扇状地にはさまれた標高約170～175mの沖積地に位置する。遺跡の背面・西側は、魚沼山地の山麓が約200‰の傾斜でせまり、さらに上の原の台地、桝形山が続く。また、前面・東側は、緩斜面が約20‰の傾斜で魚野川まで続く。さらに魚野川を越えて坂戸山（633.9m）がそびえる。緩斜面を構成する堆積物の中に円磨された中～細礫が含まれていることから、本遺跡も、背後の山地の小規模な沢による複合扇状地上に立地するといえる。



第１図　遺跡周辺の地形



第２図　周辺の遺跡分布

（国土地理院「十日町」 1:50,000原図 昭和48年発行）

2. 周辺の遺跡（第２図）

六日町を中心とする南魚沼郡には縄文時代から中世まで各時代の遺跡が数多く存在している。特に古墳は魚野川流域に約180基あり、総称して魚沼古墳群と呼ばれ、高田平野周辺部にある頸城古墳群とともによく知られている。南魚沼郡内の考古学的研究で縄文時代のものについて最初に取り上げられたのは大正時代になってからである。大泉久四郎や魚沼無口によって六日町の余川の飯綱山や五十沢地区などから出土した遺物が中央の雑誌に紹介されているにすぎない（大泉　1915・魚沼　1916）。その後、昭和12年に斉藤秀平が県内の縄文時代の遺跡と遺物を集大成し（斉藤　1937）、六日町管内では余川の飯綱山・蟻子山、小栗山の３地点が記載されている。古墳については明治20年代に注目され、六日町の若井治作・治三郎父子や野上志賀吉等によって飯綱山・蟻子山両古墳群が発掘され、遺物が数多く収集されている。昭和初期にもこの古墳群は松谷時太郎・新井寛励・若井豪比古らによって調査され、昭和７年に斉藤秀平は今までのデーターを詳細にまとめている（斉藤ほか　1932）。

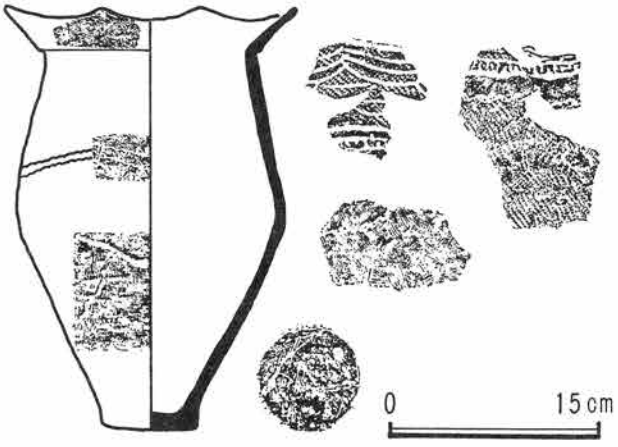
本格的に当地域の研究がなされたのは第二次世界大戦後で、中川成夫は魚沼古墳群や弥生時代の遺跡について調査し、魚沼古墳群は古墳時代後期の群集墳と把握されている（中川　1962）。また、弥生時代の遺跡として大和町の一水口遺跡の発掘調査（中川　1952）や小栗山遺跡出土の土器についての紹介があり（中川　1954）、当地域の土器は隣接する群馬・福島県出土の土器の影響があることを指摘し、本郡内にも弥生時代の遺跡があることに先べんをつけている。その後、細谷菊治は南魚沼郡全域の原始時代から中世までの遺跡・遺物を（細谷　1972）、池田亨は六日町の原始時代から中世までの遺跡・遺物をまとめている（池田　1973）。いずれも地域史を考えるうえで欠くことのできない研究資料となっている。

第２図は現在知られている六日町周辺の遺跡（縄文～古代まで）を示したもので、１は長表遺跡ある。２～４は縄文時代のもので、標高200ｍ以上の丘陵や段丘に立地している。時期は中期中葉から後期にかかるものが主体である。蟻子山遺跡(2)は古くから知られている遺跡で、出土品は飯綱考古博物館などに所蔵されている。昭和45年池田亨によって本遺跡の一部が発掘調査され、石囲炉を伴う直径約8.5ｍの竪穴住居跡が検出されている。柱穴は壁面に沿って円形にまわるよう19個ある。上ノ台遺跡(3)は上ノ原池の周辺にあって、馬高・加曽利併行期の土器や石器が数多く出土している。堂の前遺跡(4)は前二者に比して扇状地に近い比高差のあまりない地点に立地している。時期は中期後半から後期前半のものが主で、資料は塩沢町郷土資料館に所蔵されている。いずれも遺跡の規模も大きく、石器の種類も豊富で、信濃川流域をはじめ県内各地に、ほぼ共通的に認められる特色を持っている。

５～７は弥生時代の遺跡である。北沖遺跡(5)は前述した如く中川成夫が「南魚沼郡六日町小栗山出土の土器」として報告した遺跡である。標高約190ｍの丘陵尾根上に立地し、昭和４年頃黒姫神社を建立する際、丘陵尾根を整地した時直径１ｍ前後の土壙が発見されている。第３

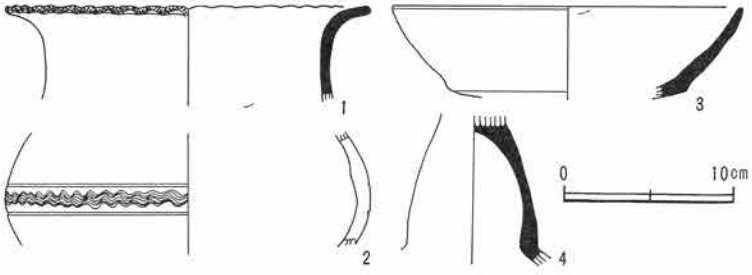
図の土器は土壙内から出土したもので、弥生時代後期初頭に東北地方南部に発達した天王山式土器と呼ばれているものである。周辺からは遺物が全く採集されない所からデポの可能性が強い。大江作遺跡(7)は魚野川の右岸、標高約180ｍの沖積地に立地し、中期末の千曲川水系に分布する栗林式土器や天竜川流域に分布する北原式土器が出土している（中川ほか　1973)。八幡遺跡(6)は標高170ｍの沖積地にあって、水田下約50㎝の所から土器が出土するといわれているが、六日町美佐島字野田道とともに実態は不明である。第４図は飯綱山Ⅰ遺跡の畑地から採集した資料である。１は弥生時代中期末の甕形土器で口辺部には縄文が、胴部には条痕文が施されている。２～４は古墳時代中期の土器で、２は須恵器の甕、３・４は土師器の高杯である。また本地点からはアメリカ型石鏃も出土している（細谷　1972)。弥生時代中期後半には大江作遺跡が示すように魚野川の沖積地に根をおろした人々がいたことが明確になり、該期の遺跡の調査については後述する古代の遺跡とともに沖積地に注目する必要があろう。

８～12は古墳群でいずれも魚野川の左岸に立地している。これらは魚沼古墳群と呼ばれている範疇の中に含まれ、造営時期は古墳時代後期で６世紀後半から７世紀ころのものと考えられている。蟻子山古墳群(8)、飯綱山古墳群(9)は比較的比高差のある丘陵上の平坦面にあって、総数60～90基を数える大規模古墳群である。万貝古墳(10)・吉里古墳群(11)・南山古墳群(12)は丘陵縁辺の扇状地に造営され、単独ないしは数基で１グループとなっている。昭和49年新潟県が行った南魚沼郡文化財総合調査で前者の古墳群出土の遺物中に中期古墳のものがあり、中期古墳が存在する可能性が指摘されている（金子ほか　1977)。

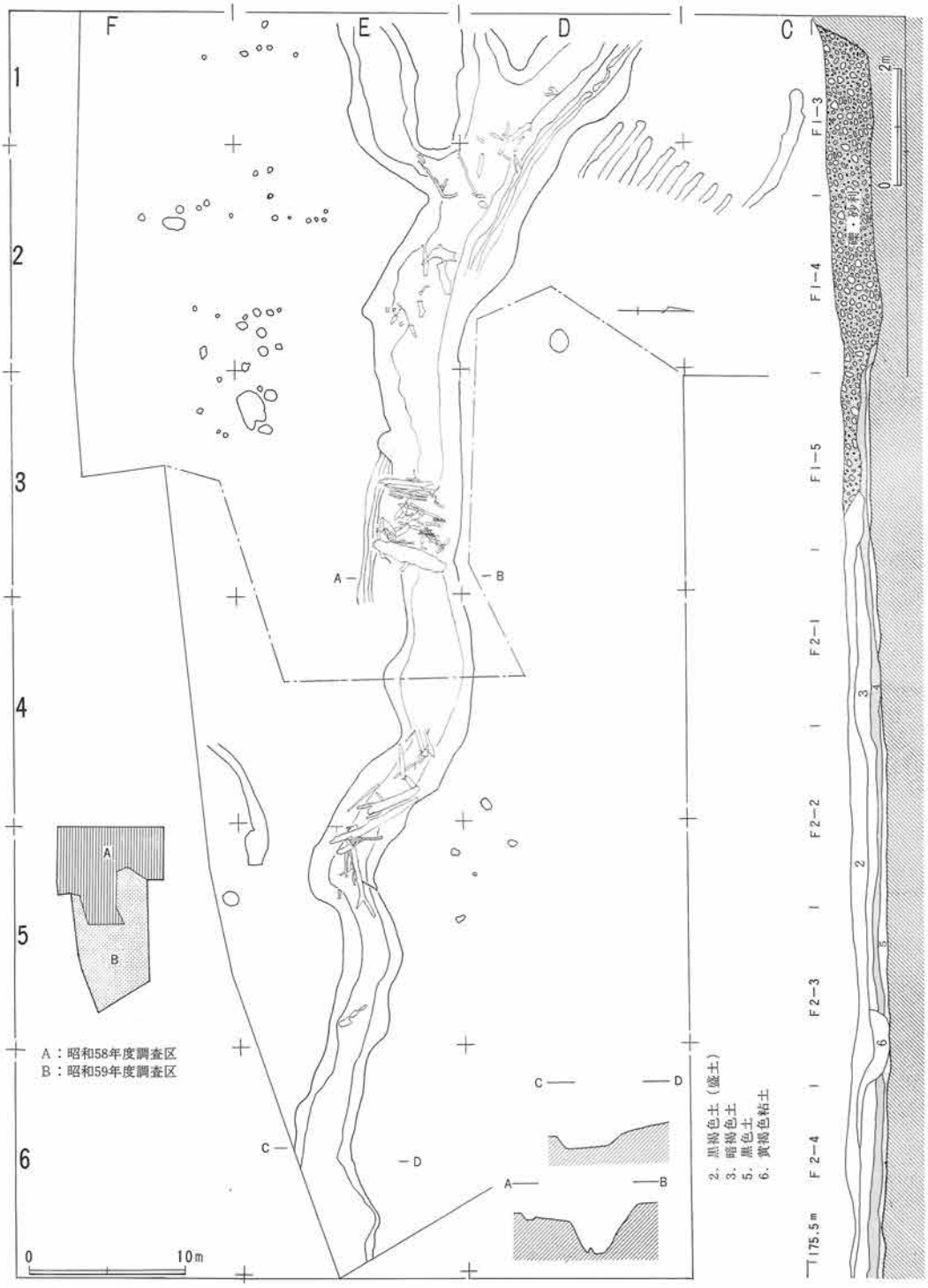


第３図　北沖遺跡出土品（中川　1954より）

13、14は奈良～平安期の遺跡である。金屋遺跡(13)は昭和57・58年県教委によって調査され、平安時代・古墳時代中期の集落と後期の土器が出土している。14は木ノ芽坂遺跡である。



第４図　飯綱山Ⅰ遺跡出土品（県教委所蔵）


F
E
D
C
1
2
3
4
5
6
A：昭和58年度調査区
B：昭和59年度調査区
0
10m
2m
礫・砂利
2. 黒褐色土（腐土）
3. 暗褐色土
5. 黒色土
6. 黄褐色粘土
F1-3
F1-4
F1-5
F2-1
F2-2
F2-3
F2-4
175.5m

第5図　遺構全測図

Ⅲ 調査の経過

1. 昭和58年度の調査

7月4日から8月3日まで調査を行った。調査の対象地は電気室建設予定地および側道を含む西側で、1843㎡である。調査対象地の周囲にはシートパイルを打設し、周辺の水田部からの水の浸透を防いだ。調査方法は昭和55年の試掘調査の結果にもとづいて、重機で遺物包含層上面まで除去し、遺物包含層・遺構は人力で調査を行った。遺構精査の結果、地山面は西から東へ緩く傾斜し、部分的には近現代の耕地整理や開田によって大きく削られている所もあった。

遺構としてはほぼ中央に西から東へ向っている大型溝状遺構、北側には幅約50㎝の小型の溝が8条、大型溝状遺構の南側ではピット群と土壙が1基検出されたにすぎない。遺物包含層は大型の溝状遺構の南側で部分的にしか残っていなかった。大型溝状遺構は西端で三又に別れ、最大幅は7.2m、深さ1.6mである。埋土は有機物を含む黒褐色土で、溝の合流点付近や東端近くには自然木（クルミ）が入っていた。

遺物は大型溝状遺構内から弥生土器・土師器・須恵器・中世陶磁器が出土し、弥生土器のみが溝の底面の砂利層から出土する傾向にあり、他は混在して出土している。ピット群の周辺からは土師器・須恵器の細片が出土し、遺物包含層は古代のものと判断した。

調査も終盤を迎え、大型溝状遺構の底面確認をしたところ、さらに3～4m下に洪水堆積層を狭んで黒色粘質土層があることが判明した。重機で洪水堆積物を除去し、人力で遺構・遺物の検出に努めたが遺物は全く出土しなかった。この黒色粘質土層は上面で検出された大型溝状遺構と同様、自然の河川跡と判断された。8月3日に調査を終了した。

2. 昭和59年度の調査

供用開始が昭和59年度の秋と決定し、工事工程の関係から3月下旬に調査対象地の除雪をし、発掘調査開始までに、トンネル工事に伴って埋立てられた盛土を除去する作業を行った。盛土の厚さは1.5～4mと厚いため、土砂の搬出には重機とトラックを使用した。

4月16日から発掘調査に着手した。検出された遺構は昨年度に検出された大型溝状遺構の続きのみであった。当初、この溝は地形から北東方向へ曲がるものと考えていたが、ほぼ直線的に東南方向へ続いて行くことが判明した。遺構は前年度に比して数少なくなり、遺物包含層は全くない。近現代の開田や耕地整理等で削られたものであろう。遺物は大型溝状遺構の底面の砂利層に混って弥生土器が出土するのみで、他の時代の遺物は全く出土していない。

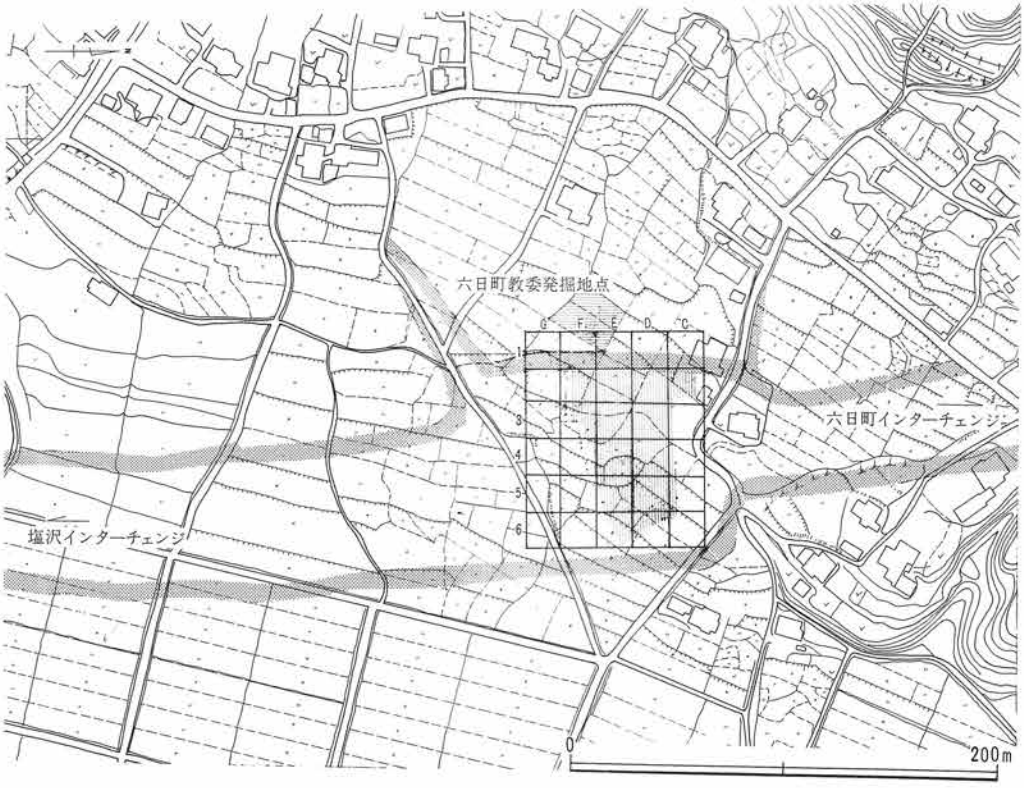
遺構・遺物が予想していたより少なかったために1383㎡を調査対象地外とした。調査は予定より早く5月23日に終了した。なお、今年度の予定面積は2567㎡であったが実質発掘面積は1184㎡で、昭和58年度分とあわせて合計3027㎡となる。

Ⅳ 調査の概要

1. 調査地区の設定（第６図）

遺跡の範囲は昭和55年度に実施した試掘調査によって大略把握されていた。しかし、遺跡の対象面積が広がる可能性があることや昭和49年に六日町教育委員会が実施した発掘調査範囲を含めるように第６図のごとく調査グリッドを設定した。グリッドの基線は磁北に一致し、東西90ｍ、南北75ｍの範囲に15ｍ×15ｍを大グリッドとした。北から南へＣ・Ｄ・Ｅ・Ｆ、西から東へ１・２・３・４とし、アルファベットと数字の組合せをもって大グリッドの名称とした。小グリッドは大グリッド内を３ｍ×３ｍに細分した。北西隅から北東隅へ１・２・３・４・５とし、南東隅が25になるように番号を付した。小グリッドの名称は大グリッドの名称と小グリッドの番号を組み合せてＣ１－２、Ｄ２－20などと呼称することにした。

発掘が２ヶ年にわたることからＣ１－１とＧ１－１を見通し、次年度設定のグリッドの基準杭とした。レベル原点は調査地域内の任意のシートパイルの頂とし、標高は175.5ｍである。



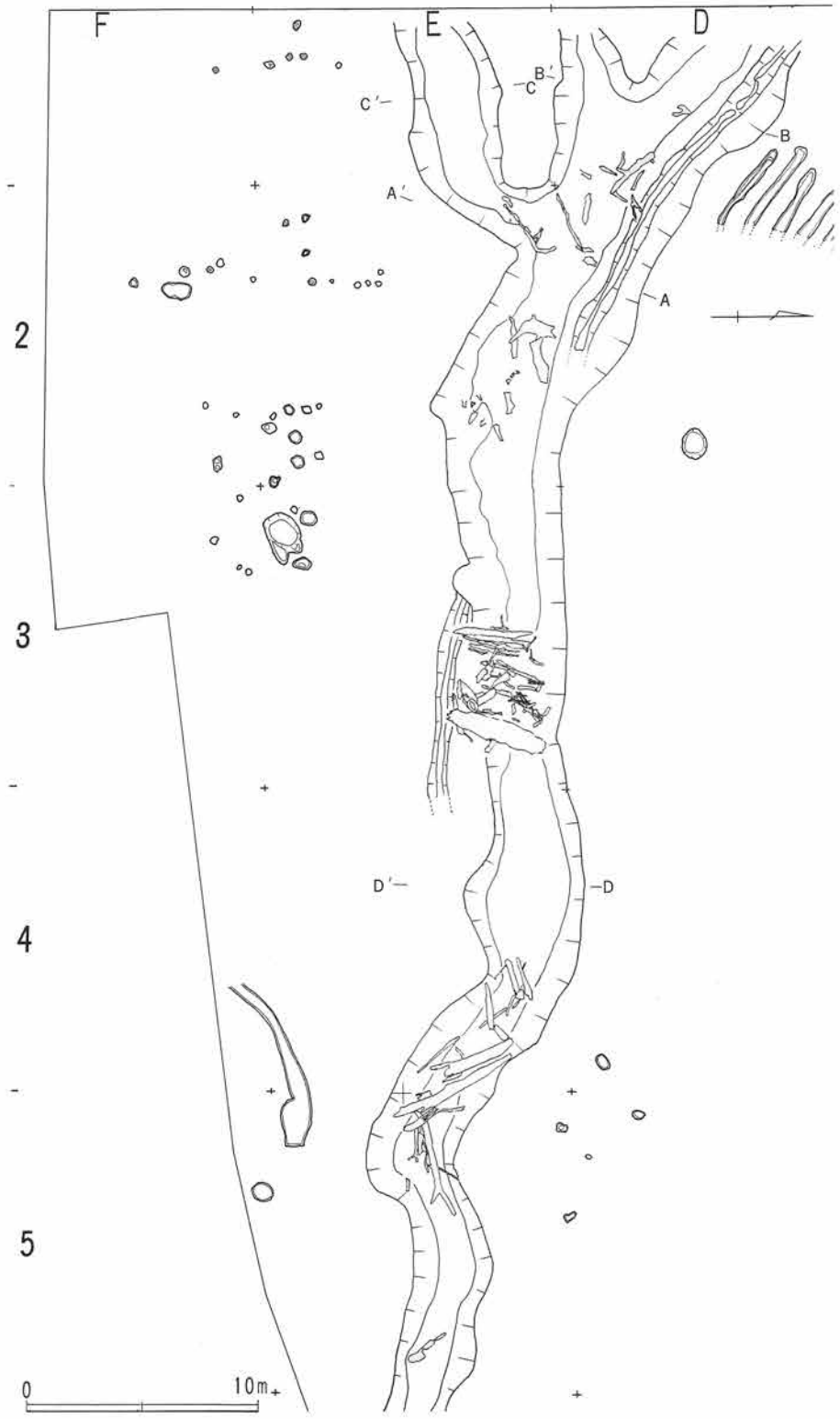
第６図　グリッド設定図

2. 層序と遺構・遺物（第８図、図版４）

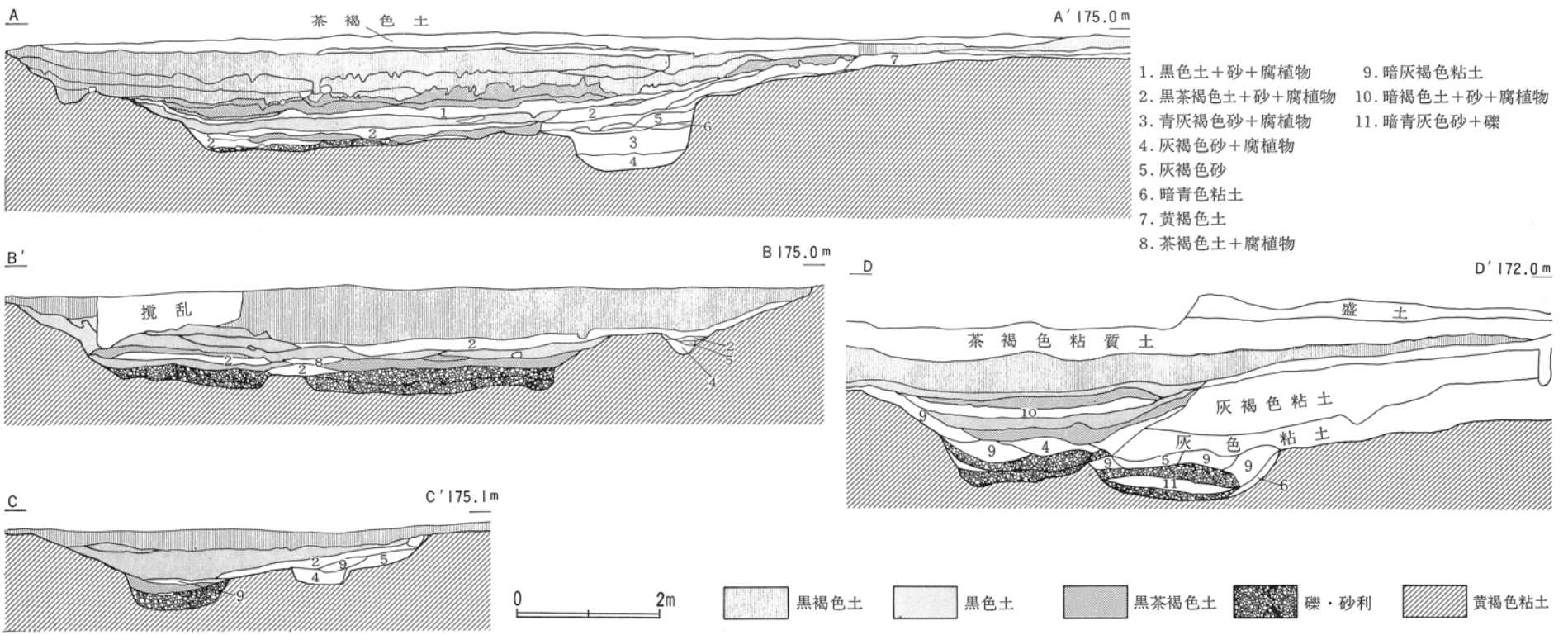
遺跡の立地する地点は東面する緩傾斜地にあって、水田になっている。おのおのの水田は約0.5～１ｍの段差があり、階段状になっている。昭和49年町教育委員会が調査主体となって実施した地点の西側では５～20㎝の耕作土下にすぐ基盤層と考えられる砂利混入の黄褐色粘土となり、北側は著しく攪乱を受けていたといわれている（中村ほか 1975)。今回の対象地でも第５図の土層断面の如く、Ｆ１－３からＦ１－５にかけては基盤層と考えられる砂利混入の黄褐色粘土層が上面から大きく掘削され、礫が埋め込まれている。当グリッド周辺が土層でも一番よく残っている地域で、最上層は水田耕作土が20～40㎝あり、第２層目が酸化鉄や黄褐色粘土の混じる黒褐色の盛土である。第３層が旧水田の耕作土と考えられる暗褐色土、第４層が暗灰褐色土、第５層が黒色土となっている。古代の遺物は第５層の黒色土から出土しているが、非常に薄く途中で切れているところもある。この包含層もＥ２の東側でしか見られず、東へ行くに従って序々に薄くなり、Ｅ３の東側では全くなくなる。また、Ｄ２ラインの畝状遺構の東側は大きく削り取られたり、Ｄ４からＤ５にかけては砂利が25～50㎝の厚さで盛られて近世陶磁器や寛永通宝が出土し、昭和48年の区画整理やそれ以前の耕地整理でかなり地形変更が行われている。

遺構はすべて小砂利を含む黄褐色粘土層上面で確認された。遺構は大型溝状遺構を除いて、Ｅ・Ｆ２およびＣ・Ｄ２に集中し、それ以外の所では散発的で、遺物包含層の遺存状況と相通じている。59年度の調査範囲からは古代・中世の遺物は一点も出土せず、遺跡そのものの範囲からはずれたものと考えられる。

遺物は大型溝状遺構から出土量の８割以上が出土し、土壙から弥生土器片、畝状遺構から土師器片が若干出土したにすぎない。大型溝状遺構からは弥生土器を主体として縄文土器や古代の須恵器・土師器、中世の陶磁器類の他に縄文時代の打製石斧・石皿片、古代の皿や椀などの木製品が出土している。弥生土器は大型溝状遺構底面の有機物を含む砂利混入の黒褐色土から出土し、縄文時代早期・後期の土器も一部混入している。弥生土器はＥ２－３・４からＥ５－15までの範囲から出土しているが、Ｅ４－１・２、Ｅ５－12～16に集中しているが、特に後者が顕著で、樹木が残存している個所からは量的に少ない。古代・中世の遺物は大型溝状遺構の埋土上面の黒色土・暗褐色土から出土するものが多い。樹木はＥ３で検出されたものは溝状遺構の上面に溜ったような状態をしているが、他のものは底面に接すかもしくは若干浮いている程度である。樹木を意図的に組んだ様子は全くなく、大型溝状遺構の左岸（Ｅ２－５）で木杭が打ち込まれた所が２ヶ所あったにすぎない。弥生土器・樹木などの出土状況から流路の屈曲度・傾斜角度、それに水力が有機的に関係していることは言をまたない。特に、弥生土器および縄文土器は器面・割口が水で洗われ、円滑になっている。破片はそれぞれ単体で、接合できるものは極めて少ない。大型溝状遺構の中からは近世の遺物が全く出土していない。また、明治８年の小栗山集落所有の土地更正図にもこの大型溝状遺構は確認されない所から、少なくとも近世以前には完全に埋没し、近世段階で水田として利用されていたものと思われる。



第7図　大型溝状遺構実測図



第８図　大型溝状遺構土層断面図

V 遺　　構

遺構として検出されたものは大型溝状遺構１、土壙１、畝状遺構、ピットの他に小型溝状遺構３がある。いずれも地山面と考えられる砂利混入の黄褐色粘土層上面で確認された。ピットおよび小型溝状遺構から遺物が出土するものは極めて少なく、時代決定すら出来ない。また、地形の改変が行われているので遺構全体を把握することはできなかった。

1. 大型溝状遺構（第７・８図、図版１～３）

西端で三又状に分岐し、ほぼ北西から南東に向う延長約84ｍの溝状遺構である。幅は一率ではなく、分岐点付近で7.2ｍと広く、最狭地点はＥ５－６境界付近で3.2ｍを測る。直線的ではなく、小さく蛇行し、Ｅ４とＥ５付近で大きく南へ屈曲している。側壁の角度は全体的に狭く、底面からは35～40度の角度で立ち上り、そして20～25度の緩傾斜となる。しかし、Ｅ３－５付近は傾斜角度は約60度できつい。底面は平坦であるが、西側が高く、東側端部とのレベル差は1.85ｍを測る。埋土は茶褐色・黒褐色・黒茶褐色土などで、底面に近づくにつれて有機物の繊維が多く混入している。断面図（第８図Ａ－Ａ′）によると南側の溝は中央部および北側の溝より古いものである。遺物は中央部および北側の溝の底面の砂利層から縄文・弥生・古墳時代の土器が、古代・中世のものは黒茶褐色土から出土する。遺物や樹木の検出状況、埋土状況から大型溝状遺構は人為的なものとは考えられず、自然の河川跡と考えた方がより妥当であろう。

なお、大型溝状遺構の左岸法面にある溝はＥ３区の溝に連続するもので、大型溝がある程度埋没したのちに掘り込まれたもので、方向等から畝状遺構と同時期頃のものであろう。

2. 土　　壙（第９図、図版４）

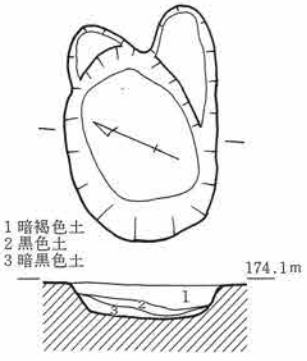
Ｅ３－20・21にあり、長径2.1ｍ、短径1.6ｍ、深さ34㎝を測る。東側には浅い２つのテラスが付いている。埋土は３層に識別され、３層から弥生土器の小片や円盤状土製品が出土している。

3. ピ　ッ　ト（第８図）

総計40個を数え、Ｅ１・２の南側に集中している。形態的には円形と楕円形のものがあり、楕円形のものは規模が大きい。深さはあまり大差がなく、埋土は暗褐色で、弥生土器の細片を含むものもわずかにある。建物等の柱穴とは考えられない。

4. 畝 状 遺 構（第７図、図版１）

Ｃ２－21からＤ２－１・６にかけて検出された。いずれも併行しているが、東端は段切りされ、西側の一部しか残存していない。幅45㎝～50㎝、深さ10㎝～24㎝で、断面は上面が緩く開くＶ字状をしている。埋土は暗褐色土で、中から土師器片の細片が若干出土したものもある。



第９図　土壙実測図（1/80）

Ⅵ 遺　　物

出土した遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中世陶磁器、近世陶磁器などの土器類の他に打製石斧・木製品・和鏡・銭貨などがある。遺物の90％以上が河川跡から混在して出土し、その大半を弥生土器が占めている。

1. 縄文時代の遺物（第10・16図、図版6・7）

縄文土器と石器があり、縄文土器は図示した3個体しかない。石器としては打製石斧と石皿と思われるものがあるにすぎず、時期的にもバラツキがある。

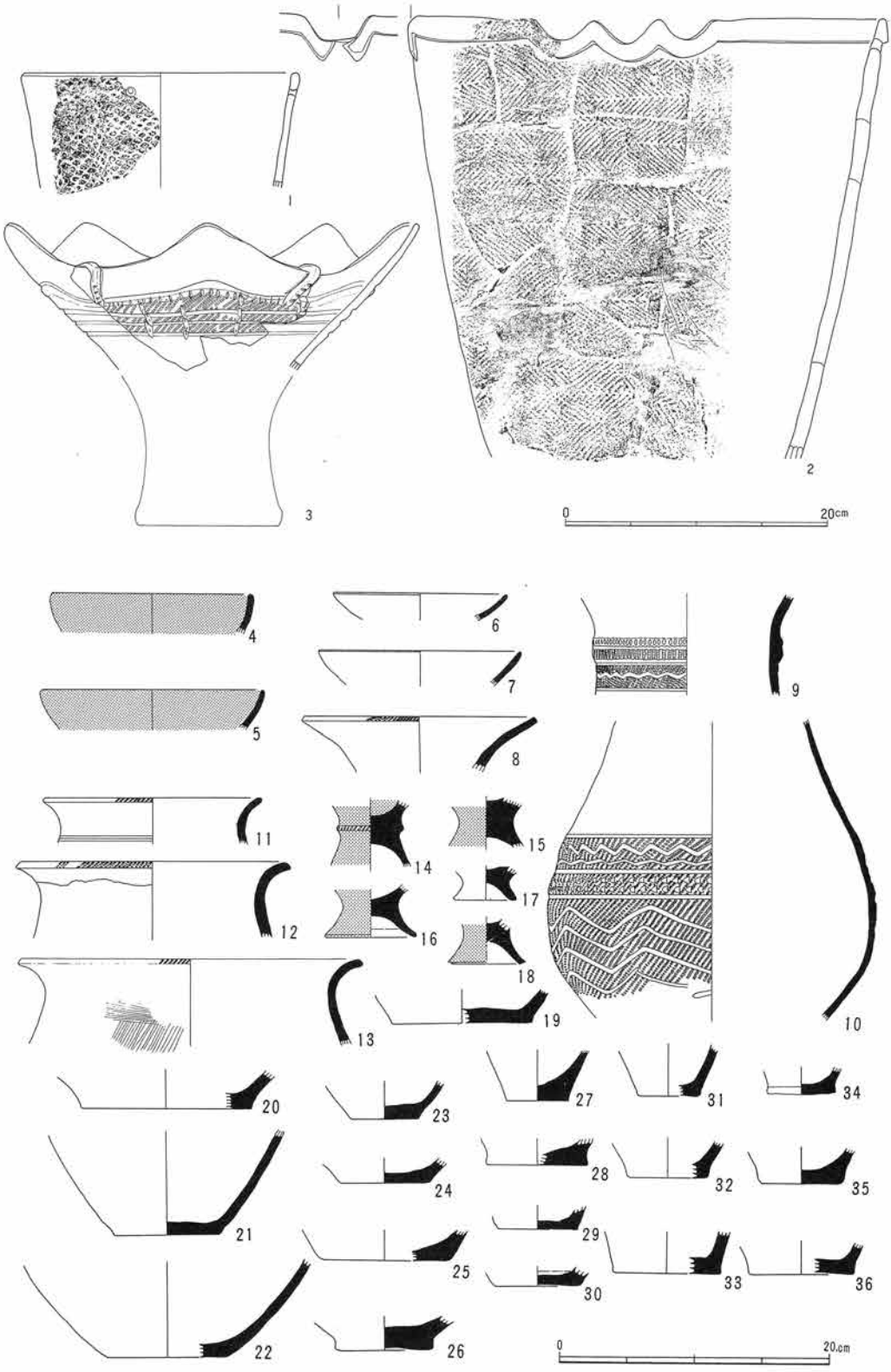
a） 縄文土器（第10図1～3）

いずれも深鉢形土器で、1は底部尖底の押型文土器である。楕円形押型文を基本的には横方向に施文し、一部縦方向に施文している。口縁部には補修孔が1個見られ、外面に煤が付着している。色調は暗茶褐色をしている。不規則な走行で施文される本土器は、早期押型文土器の中でも中魚沼郡津南町卯ノ木遺跡（中村　1963）より古いものである（片岡　1982）。2は平口縁で口辺部には粘土帯を貼り付け、1対のU字形凹部と1個の連続小波状部をもっている。連続小波状部の反対側は口辺部が剝離して文様は不明であるが、他より高くなっており、正面の可能性が考えられる。器面全体に結束羽状縄文が横方向に施され、くの字状・菱形状・X字状を呈している。結束羽状縄文は大半がLRとRLを結束した第一種のもので、他にLRとLRの結束第一種や結束第二種もある。外面には煤が付着し、色調は茶褐色である。六日町蟻子山遺跡表採資料（池田　1973）に類例がある。ほかに口辺部の近以する類例は認められないが、前期後半のものであろう。洪水埋積層出土。3は口縁が緩く外彎し、5単位の大波状となり、その間に突帯が付されている。口縁部中央に磨消縄文帯を持ち、その上下は篦で磨かれている。磨消縄文帯の上部には薄い隆帯を波状に貼付し、これに沿って沈線を引いている。この縄文は一段多条のLR縄文を横位に施し、その上から3条の平行沈線を引いている。隆帯上には連続刺突文を施し、三条の平行沈線は縦位の沈線によって区切られている。縦位の沈線内にはさらに細い平行沈線が見られる。下部の磨消縄文帯には地文の縄文の痕跡がかすかに残っている。内面も円滑に研磨され、色調は外面が黒褐色、内面が淡黒褐色をしている。小千谷市三仏生遺跡出土の第2類土器（寺村　1957）に類似し、後期後半の三仏生式土器と考えられる。関東地方の縄文土器編年でいう加曽利BI式に併行するものであろう。

b） 石器（第16図221・222）

石皿（221）　石質は砂岩で、石皿かとも思われる製品である。叩いて成形されているが、風化が著しく詳細は不明である。縄文時代の遺物か否か定かではない。

打製石斧（222）　撥型の大形打製石斧である。器厚は厚く、頭頂部には自然面を残し、主要剝離面は裏面の剝離により除去され、素材の形状は推定できない。石質は泥岩である。



第10図　出土遺物（縄文土器・弥生土器）

2. 弥生時代の遺物（第10～13図、図版６～９）

弥生土器と円盤状土製品がある。いずれも河川跡の底面の砂礫層に混入して出土しているため磨滅が著しい。また、土器の組成についても不明な所が多い。器種としては壺形土器・甕形土器、高杯形土器などがある。

a） 弥生土器

壺形土器（第10～13図、図版６～８）　長頸無花果形を呈し、頸部から胴部へのカーブは緩かで胴部下半に最大径がくるものと思われる。色調は暗褐色・黒褐色をしているものが多い。

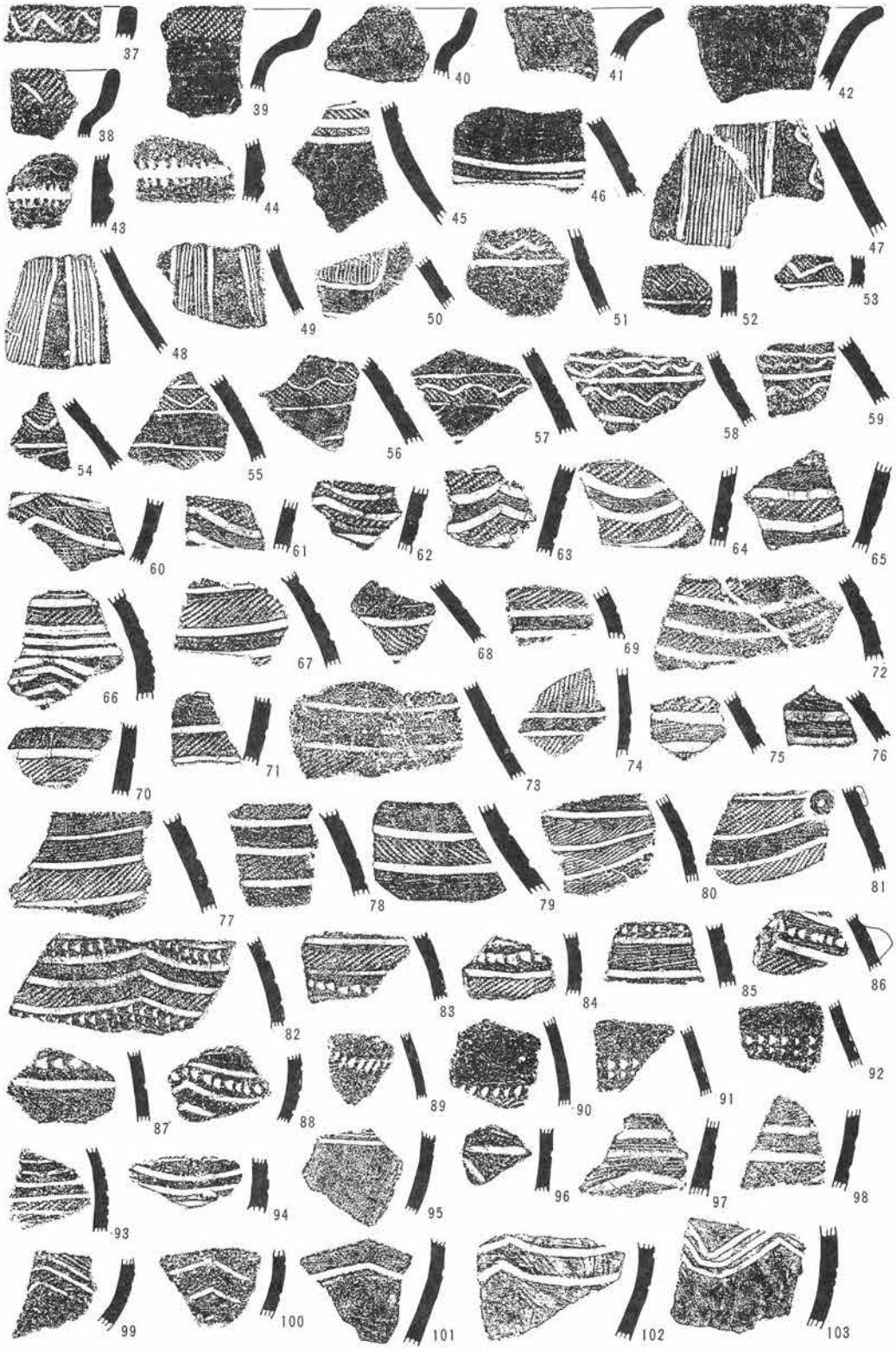
Ⅰ類（４～８、37～42、223）　口縁部を一括して本類とする。口縁の形態からさらに三種類に細分される。４～７・226は口縁が浅く内彎気味に立ち上り、器面は篦磨きされ円滑になっている。226の口縁帯には２本一組の棒状浮文が縦位に貼付され、口縁端部にはLRの縄文が押捺されている。４・５の内外面、223の外面には赤色顔料が塗布されている。37～40は有段状の口縁（翼状口縁）を呈し、口縁帯には縄文が施されたもの（39）と縄文の地文の土に篦描山形文があるもの（37・38）、口縁帯が無文のもの（40）がある。内外面ともに篦磨きされ、40の内面には赤色顔料が塗布されている。８・41・42は口縁が大きく開き、口縁端部が面取りされ、口縁端部にLRの縄文が施されている。器面は刷毛目調整の後に篦磨きされ、刷毛目がかすかに残っている。

Ⅱ類（９・10・43～46）　口頸部片で文様帯が頸部に集中し、文様帯が突帯もしくは篦状工具によって横線が引かれている一群である。突帯がつくもの（９・43・44）とつかないものがある（45）。突帯は中央部を棒状工具で横線を引き、その上から縦位に櫛歯状工具で刻目を施したもので、突帯の上下が無文となるもの（43・44）と下部に縄文を施し、横の沈線を引いた間に山形波状文を施しているもの（９）がある。45は縄文を施した後に３条の平行沈線を引いたもので、文様帯の下部は無文となっている。10は頸部下半が篦磨きされ、胴部上半から文様帯が施される。縄文を地文とし、篦で平行沈線をある程度の幅を持って３条引き、その間に山形波状文や刺究文を２段にわたって施し、胴部下半には重連続弧状文がある。46も頸部下半で篦磨きされており、10に類するものであろう。

Ⅲ類（47～50）　Ⅱ類と同様頸部であるが文様帯が縦割文様となりその間隔も等しくなる一群である。細い櫛描条線を垂下させ、その周囲を篦状工具で引いたものである。47の無文帯上には曲線文が縦に施されている。

Ⅳ類（51～59）　縄文を施した後に篦状工具で平行沈線を引き、縄文帯と無文帯が交互にある一群で、縄文帯上に篦描きの山形波状文が施されている。58・59のように縄文帯が連続して２段あり、各段に山形波状文があるものもある。頸部および胴部上半につく文様で、51は頸部、他は胴部上半の破片であろう。

Ⅴ類（60～82）　縄文を施し、四類より太い篦状工具で平行沈線を多段に施したもの（66～76）と重連続弧状文があるもの（60～65、77～82）がある。沈線で区画された空間部に縄文がある一



第11図　出土遺物（弥生土器　1/3）

群と縄文帯と無文帯が交互になる一群がある。81には円形浮文が貼付けられている。

Ⅵ類（83～92）　刺突文のある一群である。Ⅴ類に刺突文が施されたもの（83～87）とⅦ類に属すもの（88）と無文帯に刺突文が施されたもの（89～92）がある。

Ⅶ類（93～105）　器面は篦磨きされ、篦状工具で平行沈線や重連続弧状文を施した一群で、沈線にも太いものと細いものがある。105には円形浮文が貼付されている。

Ⅷ類（106）　文様の施文方法はⅢ類と同様で胴部上半に重山形文がある。

Ⅸ類（224）　注口付壺形土器で器面は篦磨きされ円滑になっている。

甕形土器（第10・13図、図版７～９）

Ⅰ類（11～13・107～114）　口縁が大きく外反するもの（11～13・110～113）と内彎気味に斜に立上るもの（107～109）がある。頸部には櫛描平行線文がめぐらせ口縁帯と胴部を区分しているもの（11・107～109・111～113）と無文のもの（12・13・110・114）がある。111は櫛描波状文とも考えられる。口縁端部には縄文を押捺したもの（11～13・107～111）と櫛ないしは篦状工具で刻目をつけたもの（112・113）がある。

Ⅱ類（115～125）　頸部に櫛描平行線文がめぐり、すぐ櫛描斜状文が施される一群である。単一方向のもの（117～120）、横方向に稜杉状に施されるもの（121～123）、縦方向に稜杉状に施されるもの（124・125）がある。

Ⅲ類（126～139）　頸部に櫛描平行線がめぐり、その下に櫛描波状文が施される一群である。横走する櫛描波状文を縦位の櫛描直線文で区切っているもの（128～138）もある。139は地文の縄文帯を縦位の櫛描直線文で区切っている。

Ⅳ類（140～148）　頸部に櫛描平行線はなく、胴上半に櫛描斜状文を施す一群である。

Ⅴ類（144～166）　Ⅱ類・Ⅳ類の破片で、櫛描斜状文を単一方向に施すもの（144～147）、方向を異にして横ないし縦に稜杉状になるもの（148～156）、交差するもの（157～161）があり、胴部の最大径部には刺突文がめぐっている（162～167）。

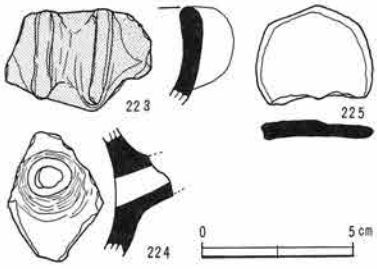
Ⅵ類（168～170）　いずれのグループにも属さないものを一括する。168は地文が刷毛目であるが研磨され、４条の櫛描連続弧状文が、169・170には刷毛目文が施されている。

Ⅶ類（16～36）　底部で、器面は篦磨きされ、直線的に斜に立上るものと一度底部付近でくびれて立ち上るもの、台付甕（16・18）がある。

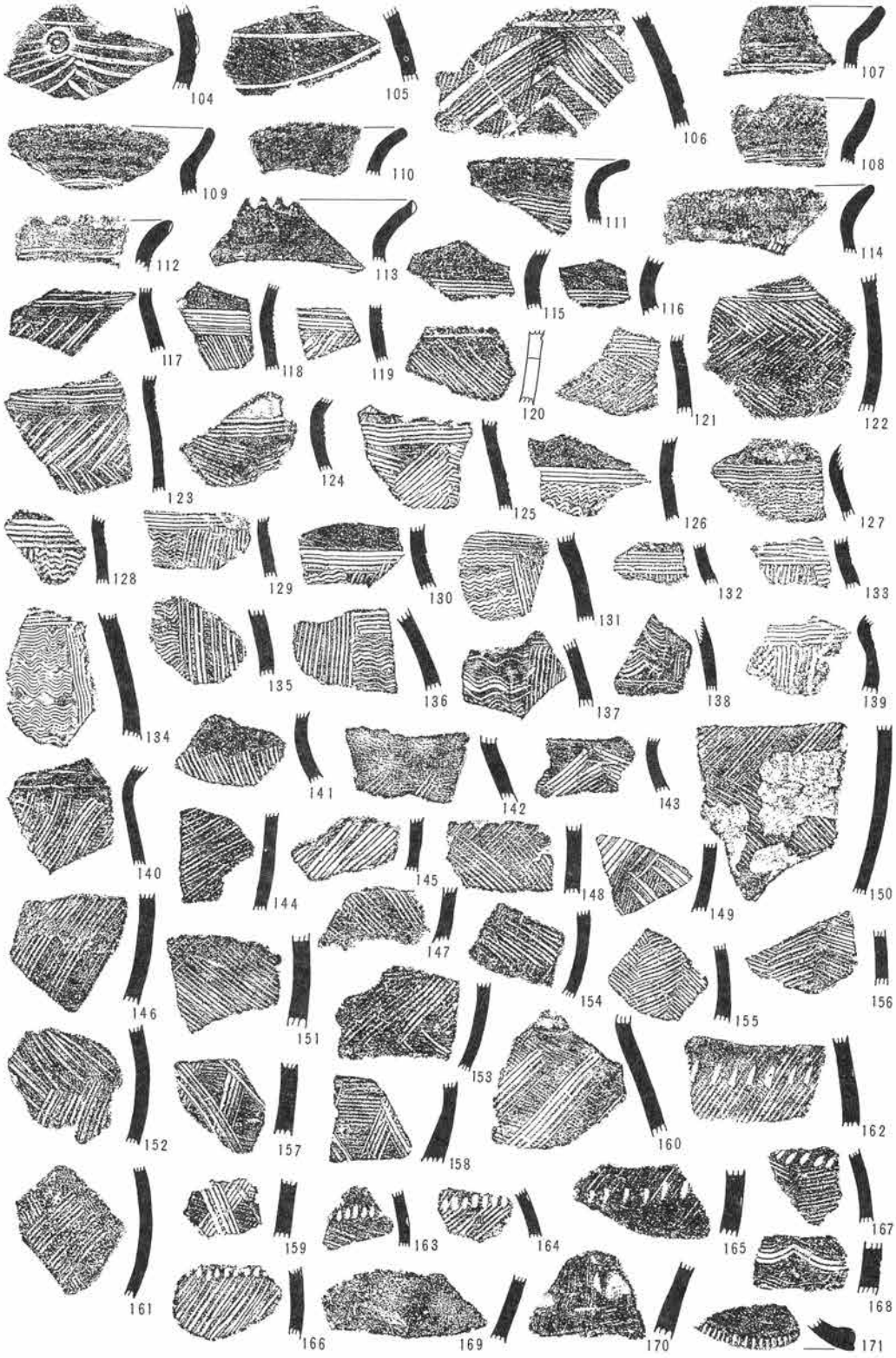
高杯形土器（14・15・171）　14には突帯がつき、刻目が入っている。171は脚部の裾で、裾部には櫛状工具で刻目が入っている。

b）　円盤状土製品（第12図225）

無文土器の周縁を荒く打ち欠いたもので、２次的調整は全くされていない。土壙内出土。



第12図　出土遺物（弥生土器ほか）



第13図　出土遺物（弥生土器　1/3）

3.　古墳時代の遺物（第15図、図版６）

土師器のみである。坩１、高杯１、甕１が図示できた。いずれも大型溝状遺構の合流点付近の砂礫層から出土した。胎土はなめらかでわずかに細砂を含み、焼成はやや軟質である。

坩（199）　口縁部と底部は欠損するが丸底を呈すると考えられる。内外面とも粗い篦磨き調整・内面は黒色処理される。頸部内面には稜を有する。

高杯（200）　脚部は欠損していて不明である。内外面とも粗い篦磨きが施され、内面は黒色処理される。

甕（201）　体部外面は縦位の粗い刷毛目内面は横位篦撫でが施される。口縁部は体部調整の後に横撫でされ、頸部内面にはその際にできた稜が明瞭である。口縁部外面と体部下半内面には炭化物が付着する。いずれも形態・調整などから古墳時代後期の所産と考えられる。

4.　平安時代の遺物（第14・15図、図版６・９・10）

ａ）　土器（第14・15図、図版６・９・10）

土師器・須恵器が平箱で４箱出土しているが実測できたものは少ない。土師器は小型壺・杯のみである。須恵器は無台杯・蓋・有台杯・甕・底部などである。

土師器杯（198）　底部は回転糸切り無調整で、内面は丁寧に篦磨きされる。内外面ともタール状の炭化物が付着する。体部外面には判読困難であるが墨書痕が残る。

土師器小型壺（197）　底部は手持ちの篦削りが施され、体部はロクロ撫でされ、内面にはうず巻状の撫で痕を残す。口縁部は欠損するが、わずかにのびるものと考えられる。

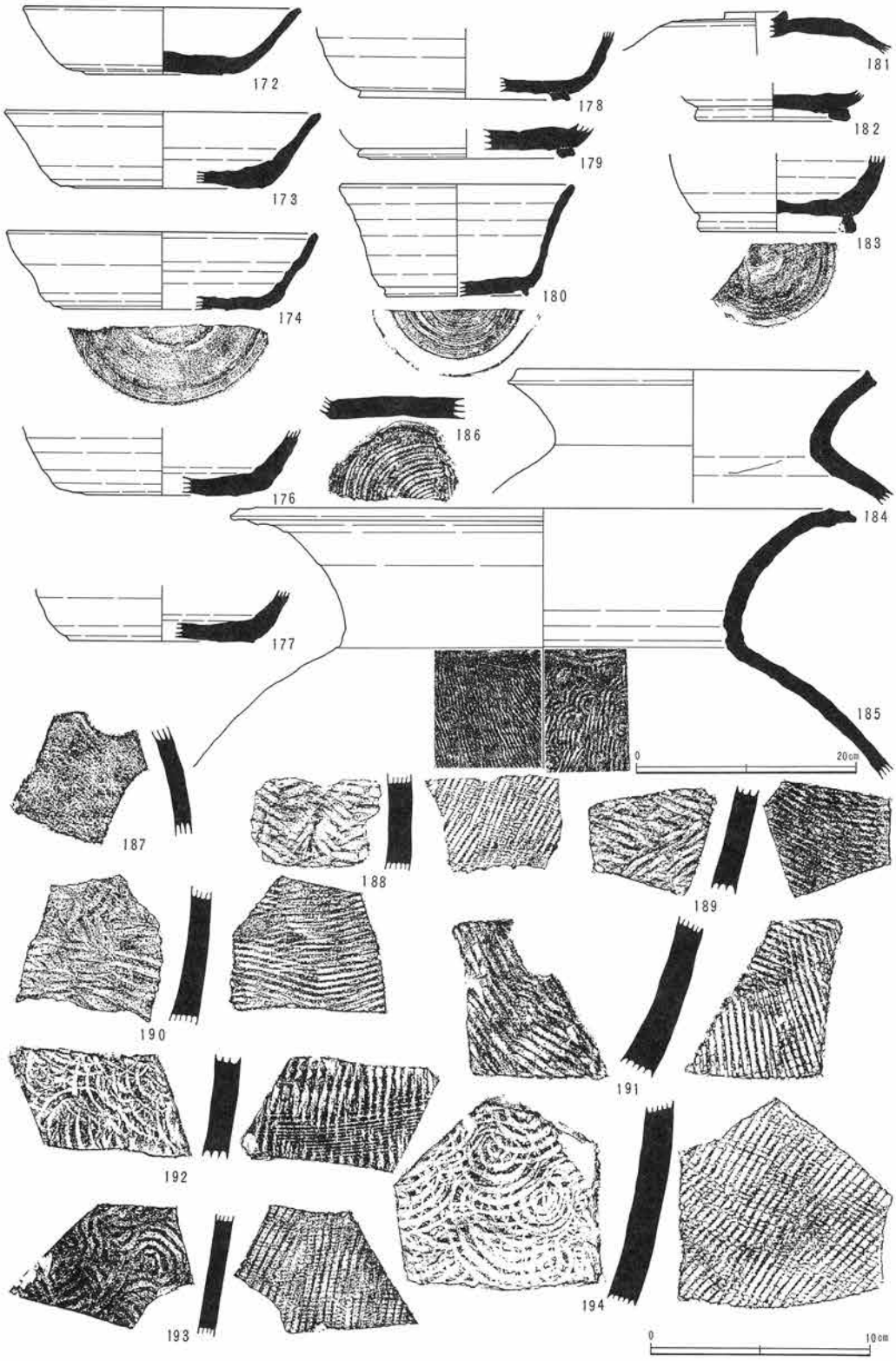
須恵器無台杯（172～177、186）　平底の底部から直線的に外上方にのびる口縁部となる。灰色を呈し、胎土は緻密・焼成はやや軟質である。底部は篦削りされるものが多いが、糸切り底（186）もある。176・177は器厚が他より厚く壺の底部とも考えられる。

須恵器蓋（181）　本例１点のみの出土である。扁平なつまみと平坦な天井部を有する。口縁部は欠損していて不明である。天井部篦削り調整、色調・胎土・焼成は無台杯と同様である。

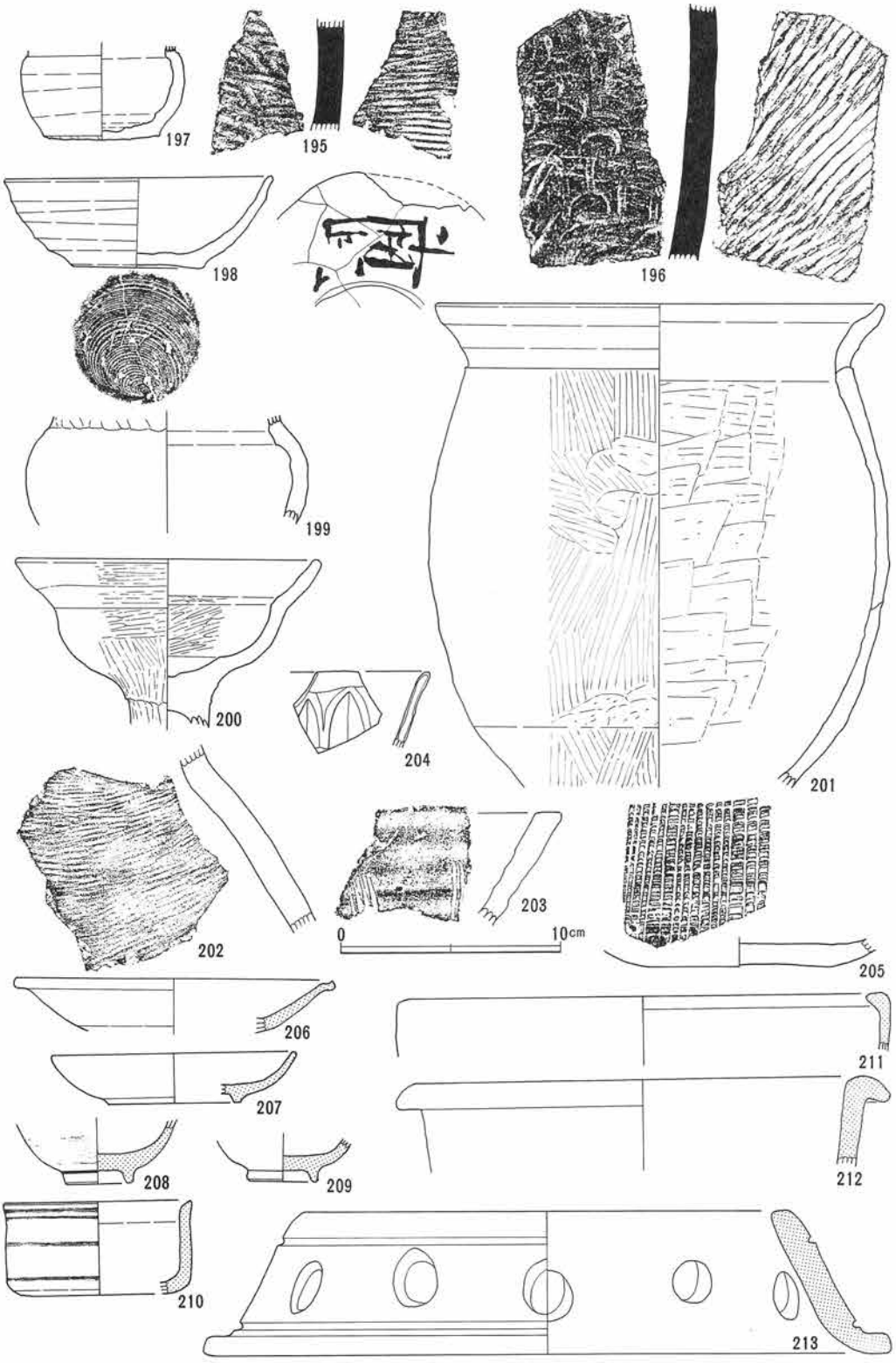
須恵器有台杯（178～180・182・183）　底部の破片が多く、全体を窺えるものは180のみである。180以外は底部篦削り後、高台が貼り付けられている。180は底部糸切り後、台部がつまみ出されている。183の底部外面には「×」の篦書きが施される。179の内面はなめらかで転用硯であろうか。182・183は器厚が厚いことから壺の底部とも考えられる。

須恵器甕（184～196）　184は口縁部は撫でられ、体部は撫で調整され、叩き目は認められない。灰色を呈し、口径16.0㎝、185は強く外反する口縁部と肩の張る体部となる。体部外面には細かい平行叩き、内面粗い同心円文を残す。当て板の後撫でられる。口径53.0㎝。他に当て板痕を撫でにより消した187や、平行叩き＋カキ目と同心円文、平行叩きと同心円文、平行叩きと平行当て板痕の組み合せがある。

以上の土器は昭和49年に調査された遺物に類例があり、９世紀から10世紀の所産であろう。



第14図　出土遺物（須恵器・土師器ほか　1/3）



第15図　出土遺物（土師器・中近世陶磁器　1/3）

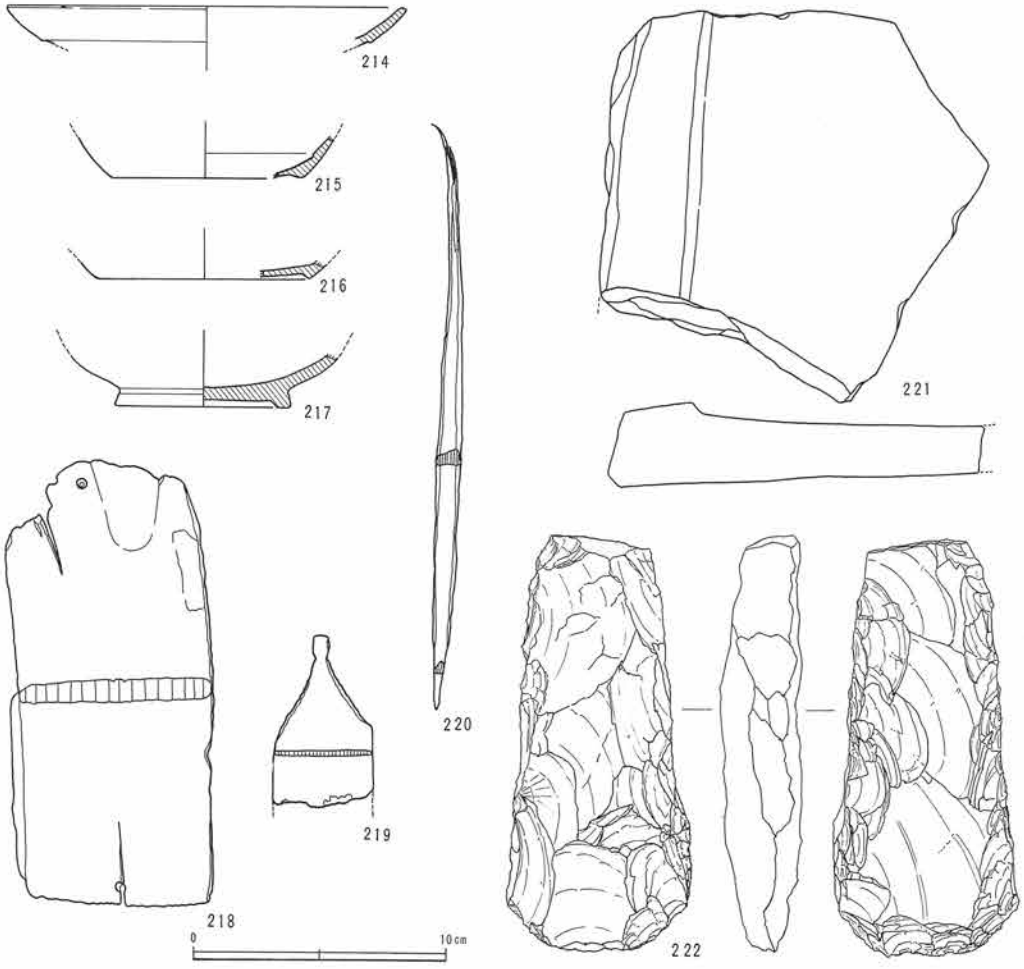
b） **木製品**（第16図214～220）

漆器と用途不明の木製品がある。漆器は皿と椀に大別され、いずれも内外面に黒漆が塗布されている。

皿（214～216）　いずれも浅い皿で、全体の形状はうかがえない。214は口縁が大きく開き、途中に段を持っている。215・216は底部片である。高台は低く、削り出し高台で、215の底部の厚さは極めて薄く仕上げられている。内面には浅い段がある。

椀（217）　高台は削り出し高台で、八の字状に開きしっかりとしている。胴部は高台から内彎気味に丸く立ち上っている。内外面ともに絵文様等は描かれていない。

用途不明木製品（218～220）　218の下辺は鋸で切断されており、全体の形状は長方形を呈するものと思われる。部分的に手斧痕が残り、上下の端部中央には釘穴がある。219は薄い板材の肩部をハスに削り落とし、頂部はつまみ状になっている。220は中央部が太く五面体に削られ上下端部に行くに従って細くなり、三面体となっている。



第16図　出土遺物（木製品・石製品　1/3）

5.　中世の遺物（第15図、図版10）

国産の陶器（珠洲焼・瀬戸焼）と舶載磁器の二種の他に和鏡が一面出土している。

a）　中世陶磁器

国産陶器（202～203・205）　202は珠洲焼の大壺の頸部から肩上半にかける破片で、外面には浅い平行条線叩目、内面にはおさえの凹痕がある。203も珠洲焼の擂鉢で、口縁端部がナデられ、内面には4条1単位の擂目がある。205は瀬戸系のおろし皿で、内面には灰釉がかけられている。外面はロクロナデで、底部の切離しは回転糸切である。

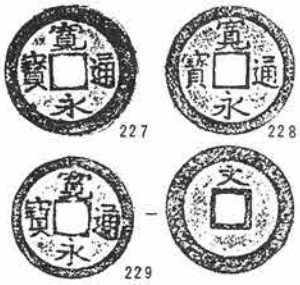
舶載磁器（204）　単弁鎬手蓮華文の青磁碗である。淡水色の青磁釉が内外面にかけられ、素地は明灰色で中に黒の斑点がある。

中世の土器類の年代は大略14世紀後半から15世紀頃のものと思われる。

第17図　出土遺物（和鏡　1/2）

b）　和鏡（第17図）

縁高5.65㎜、厚さ5.40㎜、直径10.45㎝を測る鋳銅製で、彫は浅い。縁は内傾式で界圏は中線単圏である。鏡背の外区には内区の梅樹および蝶が2匹、内区には梅樹および雀が2羽描かれ、紐は変形の花形紐座である。梅樹蝶双雀鏡と呼ぶものであろうか。彫が浅く、縁も低く、全体的に薄く仕上げられ、中世でも古い時期にさか上る可能性が多分にある。



第18図　出土遺物（銭貨　2/3）

6.　近世の遺物（第15図、図版10）

a）　近世陶磁器（第15図）

皿（206・207）　206は唐津の折縁皿で内外面に灰釉がかけられている。207は伊万里の染付で、口縁端部には口銹がある。内面には濃い青色に発色した呉須で抽象的絵画が描かれている。

茶碗（208・209）　208は染付であるが呉須の発色が悪く暗灰色をし、底部内面と見込にも同色の円文があるが、その輪郭は不鮮明である。209は白磁である。2点とも伊万里焼である。

香炉（210）　半磁器で器面は白灰色をし、その上に4条の平行線が呉須で描かれている。

甕・鉢（211・212）　211は内外面に灰釉がかけられた円筒形の鉢で、瀬戸系の焼物であろう。212は甕の口縁で内外面に黄緑色釉、そして外面には青緑色釉がかけられている。素地は粗い。

用途不明土製品（213）　素焼で円孔が段違いに穿たれ、器面には煤が付着している。

b）　銭貨（第18図）

227・229は古寛永銭、228は新寛永銭であり、229の背面には「文」という文字がある。

Ⅶ 総　　括

1. 魚沼地方の弥生遺跡について

新潟県の中でも魚沼地方における弥生遺跡の確認年度は縄文遺跡に比して新しく、その分布状況や内容については表面採集の資料が多いため不明な所が多い。魚沼地方は魚沼丘陵をはさんで信濃川水系と信濃川の支流である魚野川水系に分けられ、地理的環境も両水系では異なっている。信濃川流域では洪積段丘や沖積段丘が顕著に発達し、特に右岸がよく発達している。弥生遺跡の立地は縄文遺跡に比して低位の沖積段丘上に立地し、標高は120m内外、信濃川からの比高約20mを測り、現在ほとんど水田になっている。分布は右岸に多く、川西町の小根岸弁天社遺跡だけ左岸に立地し、遺跡の立地が沖積段丘と極めて深い関係にある。一方魚野川流域では右岸に水無川・五十沢川・三国川などの河川あり、豊富な水量で巨大な扇状地を作り出している。左岸は段丘の発達があるものの、魚沼丘陵から流れ出る魚野川支流の小河川によって段丘が埋められて小扇状地が形成され、扇状地の規模は右岸に比して小規模である。段丘は破間川や羽根川が合流する堀之内町・小出町付近で見られるのみである。遺跡の立地は沖積地を臨む丘陵ないしは段丘上にあるもの（一水口・小栗山・飯網山Ⅰ・布場平D）、丘陵の裾部にあるもの（長表）、扇状地の扇端部にあるもの（八幡・原ノ台・大江作）がある。これらを全体的に見ると魚野川流域の弥生遺跡は左岸に多く、右岸には大江作と三国川左岸にある原ノ台があるにすぎない。左岸に古墳と同様数多く分布していることは地理的環境にもとづいた結果であるが、扇状地の扇端部付近に立地する遺跡の存在は今後の魚沼地方、特に南魚沼郡内で該期の遺跡が発見される確率が極めて高い。

信濃川流域の弥生文化については古くから先学によって北信濃における千曲川水系の弥生文化の影響を受けて成立したものといわれている（中川ほか1958）。その後、昭和45年牛ヶ首遺跡が調査され、住居跡に伴う一括土器が出土した。土器は独自性を持ちながらも信濃の栗林式や百瀬式土器の影響が見ら

表1　魚沼地方の弥生遺跡

	遺跡名	所在地	時期	出土品・遺構	文献
1	朴ノ木坂	津南町下船渡	後	土器・蛤刃石斧・打製石斧	津南町教委1976
2	早稲田	中里村桂字早稲田	中	土器	中川ほか 1958
3	一里塚	〃 田沢字一里塚癸	後	土器	中里村史専門委 1985
4	城ノ古	十日町市川治字城ノ古	中	土器・太蛤刃石斧・石鏃・紡錘車	中川ほか 1958 金子ほか 1974
5	西浦	〃 〃 字西浦		土器・石鏃	中川ほか 1958
6	北原西	〃 中条字北原	中・後	土器・紡錘車	中川ほか 1958
7	牛ケ首	〃 新宮	中	土器・扁平片刃石斧・住居跡	稲岡 1972
8	根岸弁天社	川西町小根岸		アメリカ型石鏃	稲岡 1969
9	大江作	塩沢町早川字大江作	中	土器・有孔円盤状土製品	中川ほか 1973
10	北沖	六日町小栗山字北沖	後	土器	中川 1954
11	飯網山Ⅰ	〃 余川字飯網山	中	土器・アメリカ型石鏃	細谷 1972
12	長表	〃 小栗山字長表	中	土器・円盤状土製品	
13	八幡	〃 八幡字荒神		土器	細谷 1972
14	美佐島	〃 美佐島字野田道		土器	細谷 1972
15	原ノ台	〃 原字原ノ台	中	土器	池田 1973
16	一水口	大和町浦佐字一水口	後	土器・植物種子	中川 1952
17	布場平D	堀之内町堀之内字布場平	中	土器	池田 1985

れ、後期初頭の尾崎式・箱清水式土器等の櫛目文土器に結びつくものと把握されている（稲岡 1972)。一方、魚野川流域では単発的に報告されているにすぎず、実態としては不明な点が多い。一水口遺跡では櫛描波状文と横走する簾状文とを組み合せた北関東・信州系の土器と縄文の地文に連弧文等の篦描沈線文を施し、口縁の端部に刻目を入れ、体部に刺突文帯をめぐらす東北の天王山式土器の影響を受けた土器が出土している。また、大江作遺跡では魚野川流域ではあまり知られていなかった信州千曲川水系に分布する中期末の栗林式土器が出土している。布場平D遺跡では壺形土器の頸部に篦描沈線による菱形文を数段重ね、胴部への変換点には2本の平行線文と山形文を施した中期後半の土器が出土している（池田 1985)。中期後半から後期前半にかけては、数少ない資料で明確に出来ないが信濃川水系の弥生文化とはかなり違いがあり、複雑な様相を呈しているといえる。今回調査した長表遺跡から出土した土器は流れ込んだもので遺構等に伴っていないが、東北南部の土器の影響を受けたものは1点もなく、信州千曲川水系に分布する中期末の栗林式土器や百瀬式土器で、少なくとも中期末には信濃川水系と同様魚野川水系（南魚沼郡内）も信州系の弥生文化の範疇に入っていたものと考えられる。

2. 本遺跡出土の弥生土器について

新潟県内の弥生土器については先学によって種々なされてきた。地理的環境などによってかなり複雑な様相を呈し、基本的な編年等はまだ存在していないが、上原甲子郎・磯崎正彦によって県内の土器が四様式に識別された（小林 1969)。第一様式は猫山式、第二様式は山草荷式、第三様式は砂山式、第四様式は竹ノ花式で、第一様式は縄文時代晩期の大洞A′式ふうの要素を強く残しており、第二様式は東北地方南部の南御山式土器、第三様式は同じく東北地方南部の天王山式土器に、第四様式は石川県の小松式にその系統が求められるものである。

本遺跡出土の弥生土器は壺形土器・甕形土器・高杯形土器があり、天王山式土器の文様的色彩は全く見られず、信州の信濃川水系に分布している中期末の栗林式土器に極めて近似している。栗林式土器は桐原健や笹沢浩によって型式細分されている（桐原 1963、笹沢 1977）が、ここでは笹沢浩の型式細分を使用することとする。

壺形土器のⅠ類の翼状口縁を呈する一群（37～40)、Ⅱ類、Ⅳ類、Ⅴ類、Ⅵ類の地文が縄文で重連続弧状文に刺突文のある一群（60～65・77～22)、Ⅷ類が、甕形土器ではⅠ類の口縁端部に櫛ないしは篦状工具で刻目をつけたもの（112・113)、Ⅱ類、Ⅳ類・Ⅴ類が栗林Ⅰ式に比定されるものと思われる。しかし、壺形土器で頸部に突帯のつく一群はあまり類例を見ない。おそらく、北陸系の土器の影響を受けたものであろう。また、壺形土器のⅢ類、Ⅵ類の無文帯に刺突のあるもの（89～92)、Ⅶ類、Ⅸ類の注口付壺形土器、甕形土器のⅢ類、Ⅵ類それに、Ⅶ類の台付甕形土器は栗林Ⅱ式に比定されるものと思われる。なお栗林Ⅰ式の範疇に入れた甕形土器Ⅱ類・Ⅳ類・Ⅴ類の土器は千曲川流域では後期初頭まで一部が引きつがれるという（笹沢 1977)。Ⅵ類の168は東日本的な在地の土器と考えられる。

3. 新潟県の和鏡について

新潟県における和鏡の多くは、耕作中に出土したものや、神宝・寺宝として奉納されているものが多く、発掘調査によって得られた資料は数少ない。このような状況であるから和鏡の詳細な編年作業はおこなわれていない。ここでは県内の和境の地名表を作成し、特に長表遺跡出土の和鏡について論じてゆきたい。地名表については整理期間が短く、各地の鏡を全て実見することはできず、各種の文献を利用した。

県内において和鏡（註1）が出土した遺跡、もしくは伝世したものなど文献で知られるものは41遺跡70余面である。これらを遺跡の種別によって分類すると経塚14、塚6、墳墓2、館跡1、川1、寺社の宝物5、遺物包含地6、不明5となる。これらのうち遺物包含地については詳細な調査をおこなえば、性格が判明するものであり、不明なものは、個人所有に係るものや、文献に出土状況などの記述がないものである。一瞥すると経塚・塚・墳墓などに埋納されたものが多いことがわかり、全体の約70％と高い割合を示す。

これら和鏡出土遺跡の分布をみると、中越地方（特に魚沼地方）に分布の密集が認められる。これは前述したように経塚・塚などからの出土が多く、塚の分布は中越地方に多いことが指摘されており（戸根　1979）これらのことも和鏡の分布がかたよる一因と考えられる。しかし佐渡地方では1例しか和鏡出土遺跡は認められず、また阿賀野川以北の地（北蒲原・岩船地方）にも希薄な分布を呈していることなどから、これらの地方にも今後の調査によっては追加される可能性もあるがひとつの問題点として指摘されよう。

さて県内出土の和鏡の年代について、鏡のみで年代を決定することはなかなか困難であり、その研究法として、墨書などにより年号が書かれたものや、経塚において伴出した経筒などに記年銘があるものが利用されている。新潟県においては年代のわかるものは以下の5例が挙げられる。もっとも古いものは天神山経塚（青海町）の経筒にある仁安二年（1167年）のもので菊花双鳥鏡・草花文鏡が共伴している。また菖蒲塚古墳経塚（巻町）でも経筒に嘉応二年（1170）年銘があり、草花蝶鳥鏡・山吹飛雀鏡など5面の鏡と青磁・白磁の合子が共伴している。三諦寺経塚（柏崎市）では建仁三年（1203年）銘の経筒があり、梅花双雀鏡・山吹飛雀鏡2面が共伴している。稲田諏訪神社（上越市）では菊花双雀鏡に弘安元年（1278年）11月23日と針書きされ、華報寺（笹神村）では、徳治三年（1308年）銘の骨蔵器と共伴する例がある。これらから、12世紀後半には確実に経塚などに和鏡が埋納されていたことがうかがえる。これらの和鏡については伝世したものを使用したと思われるものもあるが、全国的な例からほぼ、各記年銘の時代に近い時期の所産と考えられている。今後これらの年代観については外容器などとして使用された中世陶器の詳細な編年研究から、これらの和鏡の年代はもっと確実なものとなるであろう。また菖蒲塚古墳経塚例などから経塚への埋納は12世紀後半ころから、華報寺例から墳墓への埋納は14世紀にはおこなわれている。

表2　新潟県内和鏡出土地名表

No	遺跡名	種別	出土地	出土遺物	文献
1	七ツ塚2号塚	塚	神林村七湊	鏡（φ9.9cm）、刀子、須恵器片	『弊舟』
2	うしろ山塚	塚	神林村緞岡	蓬萊鏡（φ12.6cm）、木炭片	『新潟県遺跡地図』田中真吾氏教示
3	堀切遺跡	包含地	中条町北成田字河竹島	菊花双雀鏡（2面）	『中条町史』
4	華報寺	墳墓	笹神村出湯華報寺	鏡，銅製骨蔵器，銅製仏像	徳治三年（1308）銘，『新潟県の文化財』第1集
5	横峯1号経塚	経塚	安田町寺社字横峯	藤花松鶴鏡（φ11.1cm）、山吹双鳥鏡刀子（φ10.3cm）	『横峯経塚群』
6	横峯2号経塚	経塚	安田町寺社字横峯	松喰双鶴鏡、（φ10.6cm）、素文鏡（φ9.3cm）、五鈷鈴	『横峯経塚群』
7	菖蒲塚古墳経塚	経塚	巻町竹野町字菖蒲	草花蝶鳥鏡（φ11.9cm）、山吹飛雀鏡（φ11.3cm）、菊蝶鳥鏡（11.0cm）、秋草蝶鳥鏡（φ10.3cm）、松鶴小鏡（5.0cm）、青銅経筒、青磁合子、白磁小壺	共伴経筒に嘉応（1170）年銘あり、『新潟県の文化財』、『史蹟天然記念物調査報告書第1集』
8	興業古墳	墳墓	巻町松野尾字代雨池	鏡1、鉦1、古銭（詳細不明）	『新潟県遺跡地図』
9	青海神社経塚	経塚	加茂市加茂字宮山	鏡，銅製経筒、刀子1、須恵器（甕）	『加茂文民俗資料館、資料の手引No2』
10	要害山城	?	加茂市字宮山	鏡（詳細不明）	『同上』
11	貝喰遺跡	包含地	栄町貝喰新田	端花八稜鏡（φ8.7cm）	戸根与八郎氏教示
12	小栗山経塚	経塚	見附市小栗山町七所山	山吹蝶鳥鏡（φ10.9cm）、古銭・太刀・刀子・経軸頭・須恵器片	『小栗山経塚調査報告書』
13	三諦寺経塚	経塚	柏崎市新道5963	梅花双雀鏡（φ9.57cm）、山吹飛雀鏡2面（φ9.24cm・9.24cm）、銅製経筒、壺、紙本法華経	経筒、建仁三年（1203）銘あり、『柏崎市の文化財』ほか
14	五十嵐家蔵品	?	（柏崎市本条192）	曲水菊花双雀鏡	『柏崎市の文化財』
15	円福寺蔵品	?	（寺泊町上荒町円福寺）	端花双鳥八稜鏡	『新潟県遺跡地図』
16	蓮花寺蔵品	?	（三島町蓮花寺）	鏡（詳細不明）	『新潟県遺跡地図』
17	気比神社蔵品	?	（三島町気比神社）	鏡（詳細不明）	『新潟県遺跡地図』
18	川治10号塚	塚	十日町市川治字城ノ古	梅樹双雀鏡（φ11.0cm）	『県埋文調査報告』第2
19	船坂遺跡	包含地	十日町市乙字坂ノ下410	菊花鏡（φ7.6）蓬萊鏡（φ12.0cm）	『つまり』9号
20	押付小牧社遺跡	木の空洞	津南町大字外丸丁（押付小牧社境内）	蓬萊双鶴鏡（φ10.5cm）	『津南町史』資料編（上巻）
21	七社ノ宮遺跡	?	津南町上郷宮野原字七社ノ宮5702	菊花双鶴鏡（φ11.0cm）、蓬萊鏡（φ11.2cm）	針穴あり奉納、『津南町史』資料編（上巻）
22	天狗し遺跡	?	津南町上郷宮野原字天狗し5329	無圏索紐松柳鏡（φ8.0cm）、重圏蓬萊鏡（φ12.0cm）	『津南町史』資料編（上巻）
23	結東の塚	墳墓	津南町大赤沢	鏡（詳細不明）	
24	長表遺跡	川	六日町小栗山字北沖	梅枝蝶双雀鏡（φ10.5cm）	
25	西山の塚	塚	六日町大月字西山	菊丸文散双雀鏡（φ10.8cm）	松永靖夫氏教示
26	三日月経塚	経塚	六日町坂戸字薬師	鏡（詳細不明）	『新潟県遺跡地図』
27	大御堂2号経塚	経塚	塩沢町宮野下字久根添	山吹双雀鏡（φ11.1cm）経筒、四耳壺	経筒に「守真安」の墨書銘あり
28	中正善寺1号経塚	経塚	上越市中正善寺	鏡、中世陶器・扇・灰	高田市文化財調査報告第5集
29	中正善寺2号経塚	経塚	上越市中正善寺	千鳥菖蒲文鏡（φ9.6cm）、中世陶器片	『同上』
30	中正善寺5号経塚	経塚	上越市中正善寺	双鶴菊花散文鏡（φ8.6cm）	『同上』
31	北塚	塚	上越市五智4丁目	鏡18面、古銭・鉦1・鍬1・刀子2	平野団三『越佐研究』第35集
32	稲田諏訪神社	?	上越市西松野木字一番割	菊花双雀鏡（φ11.2cm）	弘安元年（1278）針書銘あり、『新潟県の文化財』第1集
33	称念寺	?	上越市寺町2丁目	双鶴花文八稜鏡（φ23.0cm）	『高田市文化財調査報告書』第5集
34	飯綱山	?	（上越市郷津明静院蔵）	萩柑鳥文鏡（φ5.0cm）	『直江津の歴史』
35	倉下経塚	経塚	浦川原村倉下（熊野神社）	鏡（3面）、刀子2・銅製片口	『浦川原村史』
36	坪ノ内館跡	館跡	新井市長森字堂の浦	牡丹丸文散双鶴鏡（φ10.7cm）	（現地説明会資料）
37	白山神社	?	（能生町白山神社）	鏡（φ11.0cm）、八稜鏡（φ8.5cm）	『能生町白山神社の宝物』
38	天神山経塚	経塚	青海町青海	菊花双鳥鏡（φ11.0cm）、蓮花文鏡（φ9.7cm）、不明鏡（φ11.0cm）、経筒、中世陶器（外筒）	仁安2年（1167）銘、『青海町―新生へのあゆみ―』
39	伊藤家蔵品		（青海町外波）	山吹双雀鏡（φ11.0cm）	『同上』
40	下山墳墓	墳墓	村上市天神岡	洲浜梅樹双雀鏡（φ13.6cm）、中世陶器	『新潟県遺跡地図』
41	三宮貝塚	?	畑野町三宮、三宮神社	素文四稜鏡（φ8.4cm）	『佐渡博物館研究報告』第4集

（　）内は保管場所を示す

和鏡については中野政樹は実用品としての機能の他に信仰の機能として以下の７点をあげている（中野　1969)。まず第１として、神霊を表徴するのに最もふさわしい鏡といえる御霊代として神社等に祀られるもの、第２として神の調度品である御神宝として神に献じられるもの。第３として鏡面に神仏の姿を線彫または墨画で表わし、神像として礼拝したもの。第４として、神像と同様な性格で仏像の胎内に納められ、仏の本体としたもの。第５として、経塚に埋納されたもので、この場合は鏡は刀剣などと共に納められたものと、経筒の側に埋納するのではなく、経筒の蓋や底板として使用されたものの２種がある。前者は奈良時代における鎮壇具や舎利収蔵と同じく除魔の意味で用いられたものと考えられる。また後者は単に蓋など鏡の再利用としたものではなく、経巻を仏教から護持するという意味を強く意識していると考えられている。また第６として、海や湖沼に鏡を投げ入れる習わしである。これは海の場合においては交通上の安全の祈願などの意味もある。また湖沼に投入する鏡の場合、湖沼の水面と鏡面とが同様であることからこれらの鏡奉納がなされたと考えられる。第７として、神に祈願するときに奉賽のためこれを奉納したもので、奉納祈願の趣意を書いたものがあり、孔をあけてつるしたものなどが多く認められる。

以上が鏡に関する信仰の全容であるが、新潟県内で確認されている鏡についてみるならば、多くは経塚・塚などへの埋納であり、北塚（上越市）のように数回に及ぶ埋納例も認められる。また大御堂経塚（塩沢町）のように経筒の蓋として使用されたものもある。また小牧社（津南町）のように奉納の為にかけてあったものなども存在する。中野分類による鏡信仰の１、２、５、７などが主に県内においておこなわれたものと思われる。また６にあげた池・沼などに投入された鏡の例は確たるものは認められていない。

このような状況の中で、長表遺跡では、川と考えられる溝上面から出土しており、他の県内の和鏡出土状況とは異なっている。溝からの出土の場合、廃棄されたものか、もしくは災害など不可抗力によって川などに流されたものか、信仰の対象として投げ込まれたものか３通りの可能性が考えられる。現在までのところ、長表遺跡の例が３種の可能性のうちどれにあたるか詳細に考えてみると、まず第１の廃棄の場合、本遺跡例のものは、鏡背面から打たれて凹んだキズが２ヶ所あるが、鏡面はなめらかで、わずかに錆があるのみで、破損による廃棄とは考えられない。また第２の自然の洪水等については川の中に自然遺物である流木等は認められるが、家の部材などはなく、洪水等が発生したことは確認できず、根拠は薄いものと思われる。また信仰上の遺物としては、山形県羽黒山のように信仰の対象物は長表遺跡周辺には認められず、また大きな沼や池なども存在しない。近くに修験道の山である八海山があるのみであり、信仰に直接結びつける論拠は薄いと思われる。しかし、単に溝（川と考えられる）から鏡が出土したというのではなく何らかの精神的作用が働らいた結果、川に鏡が投げ込まれたのではないかという疑問がわいてくる（註２)。現状では不明な点が多く、結論は導き出せないが、今後この種の和鏡の出土状況について注意をはらう必要があるものと思われる。

註1　ここでいう和鏡とは、古墳時代や奈良期から平安時代前半の彷製鏡とは区別し、平安時代後期から近世にかけてのものをさす。なお柄鏡などもあるが、ここでは円鏡・八稜鏡をあつかうこととした。新潟県内和鏡出土地名表については文献であつめられるものについては文献とともに掲載した。各鏡の文様名については該当文献に使用されている名称を載せた。

註2　八海山に関する信仰については鈴木昭英（鈴木　1978）の詳細な論文がある。それによると古代・中世の信仰については不明であるが、南北朝期に著わされた安居作の『神道集』に弥彦・米山についで越後三の宮として八海大明神をあげてあり、信仰されていた可能性がある。近世前半ころは忘れられていたが、近世後半から末には盛んとなり、里宮も多く作られた。このころ山姿を望見できる里地で遙拝し、祭祀してきたものと考えられている。このように八海山に山神が鎮守しているという観念は古くからあったと思われる。

4. ま と め

本遺跡は魚野川の左岸の複合扇状地に立地している。今回の調査では遺構と呼ばれるものは畝状遺構と土壙の他ピット群があるにすぎなかった。当初大型溝状遺構と考えていたものは自然の河川跡と判明した。遺構そのものについては地形の改変が比較的古くから大規模に行われていたため、遺存状況は極めて悪かった。このため、遺跡全体の構造や性格を明確にすることはできなかった。遺物は縄文時代早期から近世まで、ない時代のものはないが、大半の遺物は自然の河川跡から出土している。遺物そのものもは自然的条件で河川に流入したもので、人為的に投棄したとは考えられない。このために、遺物の資料的価値は劣るものの、県内の考古学的研究に寄与する点は数多くあるものと思われる。

注目される遺物は縄文時代早期の押型文土器と弥生時代中期の土器である。押型文土器は南魚沼地方で最初のもので、早期の県内の該期の文化を考える上で必要欠くべからざる資料となろう。弥生時代中期後半の土器は信濃の千曲川流域に分布する栗林式土器で、今までは信濃川流域の十日町市所在の牛ヶ首遺跡出土の土器が最下流であった（笹沢　1977）。本遺跡出土の土器によって、その分布は魚沼丘陵を越えた魚野川流域にもその文化の影響が明確にあることが判明し、塩沢町大江作遺跡とともに魚野川流域も信濃川流域と同様、信濃の千曲川水系の弥生文化の中に包括されていたことが判明した。伴出遺物が数少なく、当時の社会生活などを明確に把握されないが、魚野川の沖積地に根をおろした人間が弥生時代中期末に存在し、該期の生活跡が発見される可能性は極めて強い。今回の調査地域内にも弥生時代の土壙が1基確認されている所から弥生時代の遺跡の主体部が必ず本遺跡の周辺に存在することは確実である。また、本遺跡出土の土器と同時期の遺物が出土した塩沢町大江作遺跡の存在や、実態が不明であるが後期の遺跡と考えられている六日町八幡遺跡などの存在から、魚野川流域の沖積地には弥生時代の遺跡はもちろんのこと、古墳時代の生活跡もかなり埋没していると考えられ、今後の調査・研究に期待したい。

参 考 文 献

ア　阿部恭平　1976　「十日町市船坂出土の和鏡について」『つまり』９号　妻有の文化遺産を守る会

青木重孝ほか　1966　『青海―その生活と発展―』　青海町

イ　池田　亨　1973　『六日町の文化財』

池田　亨　1985　『布場平Ｄ遺跡』　堀之内町文化財調査報告書第３輯　堀之内町教育委員会

稲岡嘉彰　1969　「中魚沼郡の先史遺跡と小根岸のアメリカ形石鏃」『長岡市立科学博物館報NKH』16　長岡市立科学博物館

稲岡嘉彰　1972　「新潟県十日町市牛ヶ首弥生遺跡について」『信濃』第24巻第１号　信濃史学会

ウ　魚沼無口　1916　「越後に於ける有史以前の住民及び其の遺物」『国学院雑誌』第22巻12号　国学院大学

オ　大泉久四郎　1915　「越後の石器時代遺跡・遺物」『人類学雑誌』334号　東京人類学会

大場磐雄　1978　「水霊信仰の考古学的考察」『祭祀遺跡―神道考古学の基礎的研究―』　角川書店

カ　片岡　肇　1982　「押型文土器」『縄文文化の研究３』　雄山閣

金子拓男・戸根与八郎ほか　1974　『北越北線埋蔵文化財発掘調査報告書』埋蔵文化財緊急調査報告書第２　新潟県教育委員会

金子拓男ほか　1977　「伊平乃郡の古墳」『南魚沼』新潟県文化財調査年報第15　新潟県教育委員会

柏崎市教育委員会　1982　『柏崎市の文化財』

加茂市民俗資料館　1977　『民俗資料館資料の手引』No２

川上貞雄　1979　『横峯経塚群』　安田町教育委員会

キ　桐原　健　1963　「栗林式土器の再検討」『考古学雑誌』49巻３号　日本考古学会

ク　久野　健　1968　『能生町白山神社の宝物―仏像を中心に―』　白山神社文化財保存会・能生町文化財保護委員会

コ　小出義治ほか　1978　『小栗山不動院裏山経塚群』　見附市教育委員会

小林行雄・杉原荘介編　1969　「北陸地方Ⅱ」『弥生式土器集成・本編』　東京堂出版

サ　斉藤秀平ほか　1930　『新潟県史跡名勝天然記念物調査報告』第１輯　新潟県

斉藤秀平ほか　1932　『新潟県史跡名勝天然記念物調査報告』第３輯　新潟県

斉藤秀平　1937　『新潟県史跡名勝天然記念物調査報告』第７輯　新潟県

坂井秀弥ほか　1985　『新潟県新井市坪ノ内遺跡』現地説明会資料　新潟県教育委員会

笹沢　浩　1977　「入門講座・弥生土器―中部高地２―」『考古学ジャーナル』No133　ニューサイエンス社

シ　椎名仙卓　1963　「七ツ塚」『磐舟』新潟県文化財調査報告書第９　新潟県教育委員会

ス　鈴木郁夫　1978　『地形分類図　十日町』　新潟県

鈴木昭英　1978　「八海山信仰と八海講」『富士御嶽と中部霊山』　名著出版

ツ　津南町教育委員会　1976　『苗場山麓地域国営総合農地開発事業区域内遺跡調査報告書』津南町文化財調査報告書No11　津南町教育委員会

津南町史編さん委員会　1984　『津南町史』資料編上巻　津南町

テ　寺村光晴・中村孝三郎・松崎庚一　1957　『三仏生』　長岡市立科学博物館研究調査報告１　長岡市立科学博物館

ト　戸根与八郎ほか　1979　『国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書』新潟県埋蔵文化財調査報告書第17　新潟県教育委員会

戸根与八郎ほか　1980　『中条町遺跡詳細分布調査報告書』　中条町教育委員会

ナ　中川成夫　1952　「南魚沼郡浦佐遺跡報告」『越佐研究』二・三集合併号　新潟県人文研究会

中川成夫　1954　「南魚沼郡六日町小栗山出土の土器」『越佐研究』七集　新潟県人文研究会

中川成夫ほか　1958　「妻有地方の考古学的調査」『妻有郷』新潟県文化財年報第３　新潟県教育委員会

中川成夫ほか　1962　「越後・佐渡」『古代学研究』30号　古代学研究会

中川成夫ほか　1963　『新潟県佐渡三宮貝塚の研究』佐渡博物館研究報告第四集　佐渡博物館

中川成夫ほか　1973　『塩沢町における考古学・民俗学の調査Ⅲ』　塩沢町教育委員会

中沢　肇ほか　1971　『直江津の歴史』　直江津市教育委員会（現在　上越市）

中野政樹編　1969　『和鏡』　日本の美術No42　至文堂

中村孝三郎　1963　『卯の木押形文遺跡・貝坂遺跡』長岡市立科学博物館研究調査報告５　長岡市立科学博物館

中村孝三郎ほか　1975　『長表遺跡』　六日町教育委員会

中里村史専門委員会編　1985　『中里村史』資料編上巻　中里村

ニ　新潟県教育委員会　1978　『新潟県遺跡地図』　新潟県教育委員会

新潟県商工労働部企業振興課　1970　『魚野川流域地下水調査報告書』　新潟県

ヒ　平野団三ほか　1963　「正善寺の獅子舞と遺跡・遺物」『高田市文化財調査報告書』第５集　高田市文化財調査委員会（現在　上越市）

平野団三　1975　「謎の北塚」『越佐研究』35集　新潟人文研究会

広瀬都巽　1968　『和鏡の研究』　角川書店

ホ　保坂三郎　1966　「頸南の古美術」『頸南』新潟県文化財年報第６　新潟県教育委員会

細谷菊治　1972　『先史時代から中世までの南魚沼郡の歴史』

ヤ　山下　昇　1970　「柏崎一銚子線の提唱」『島弧と海洋』　東海大学出版会

大型溝状遺構・畝状遺構（南から）

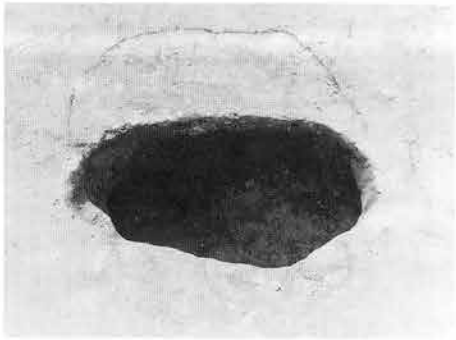
畝状遺構（西から）

58年度調査　大型溝状遺構内出土の自然木（東から）

58年度調査　大型溝状遺構内出土の自然木（南から）

59年度調査　大型溝状遺構内出土の自然木（東から）

59年度調査　大型溝状遺構内出土の自然木（西から）



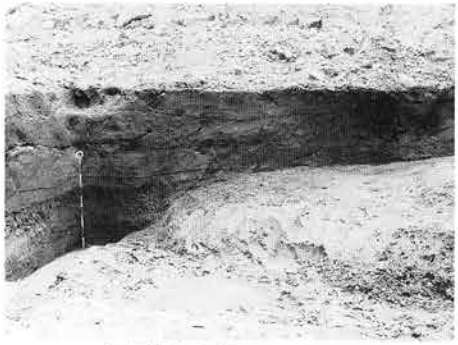
ピット

土壙

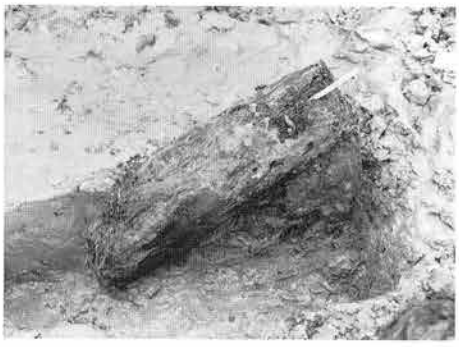
大型溝状遺構断面（A－A′）

大型溝状遺構断面（A－A′）

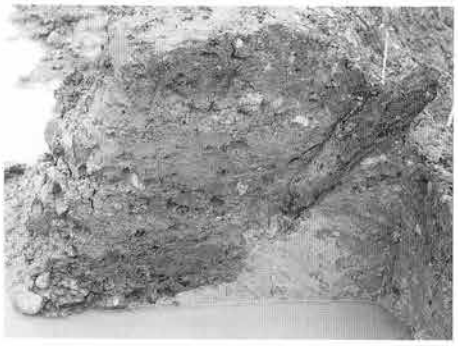
大型溝状遺構断面（D－D′）



大型溝状遺構（E6－17～19）

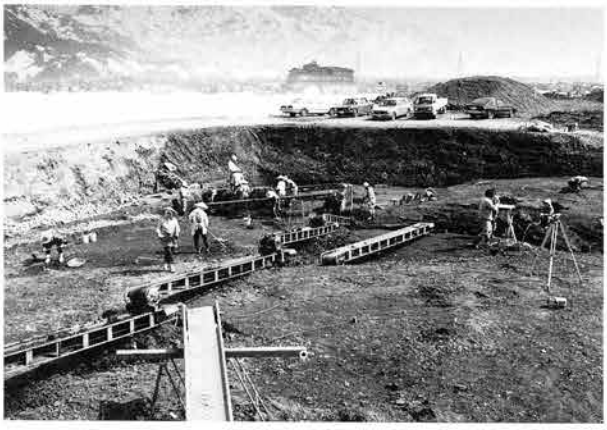


木杭打込状況

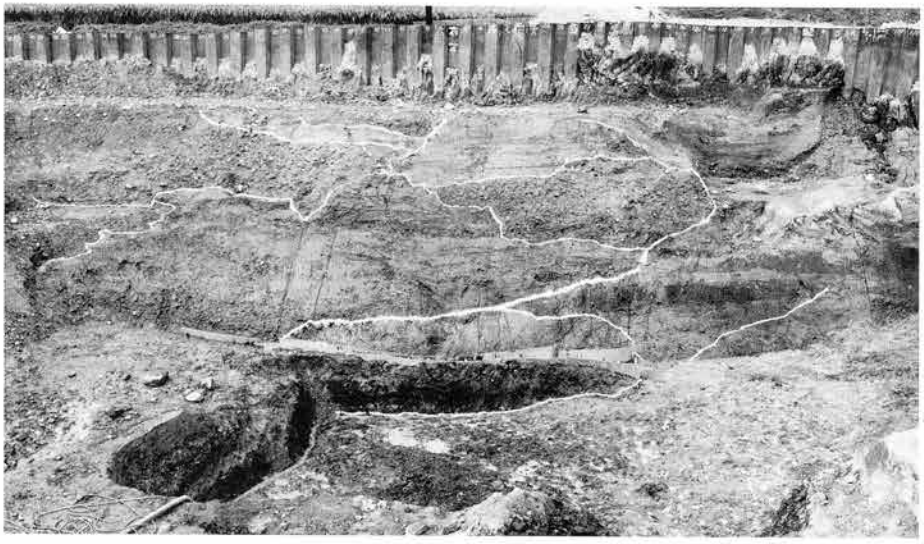


木杭打込状況

昭和58年度発掘状況



昭和59年度発掘状況



土層断面

2

199

201

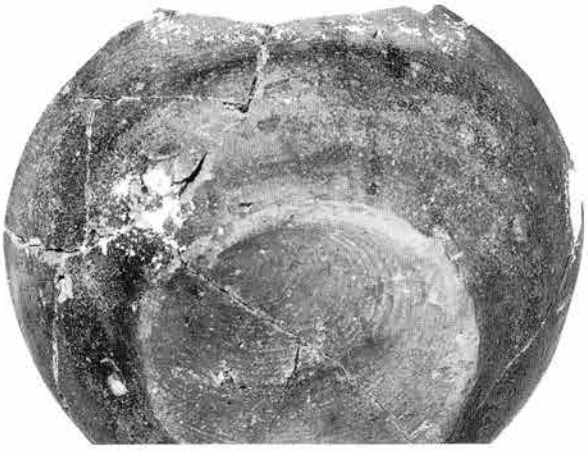
10

172

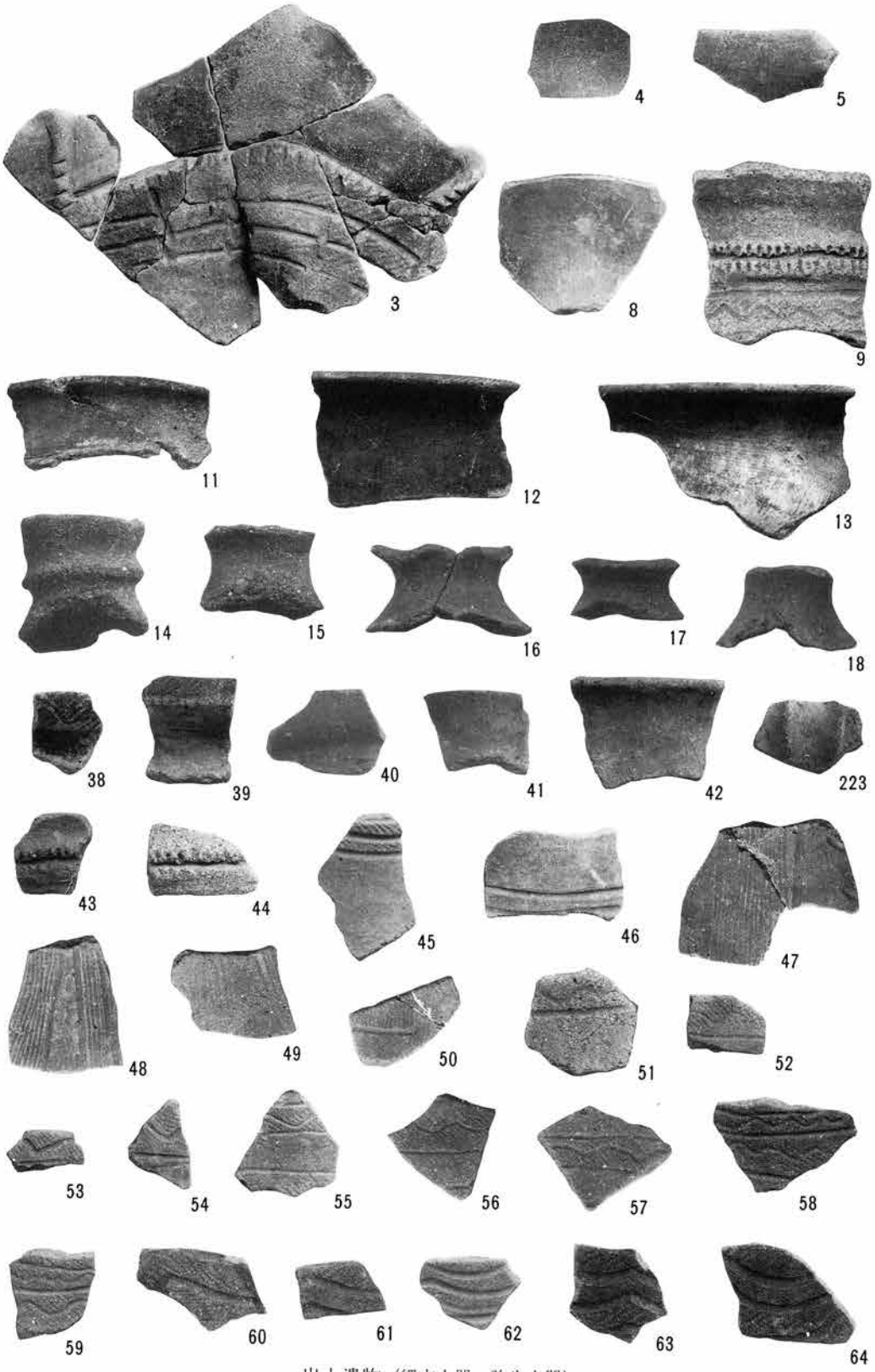
198

197

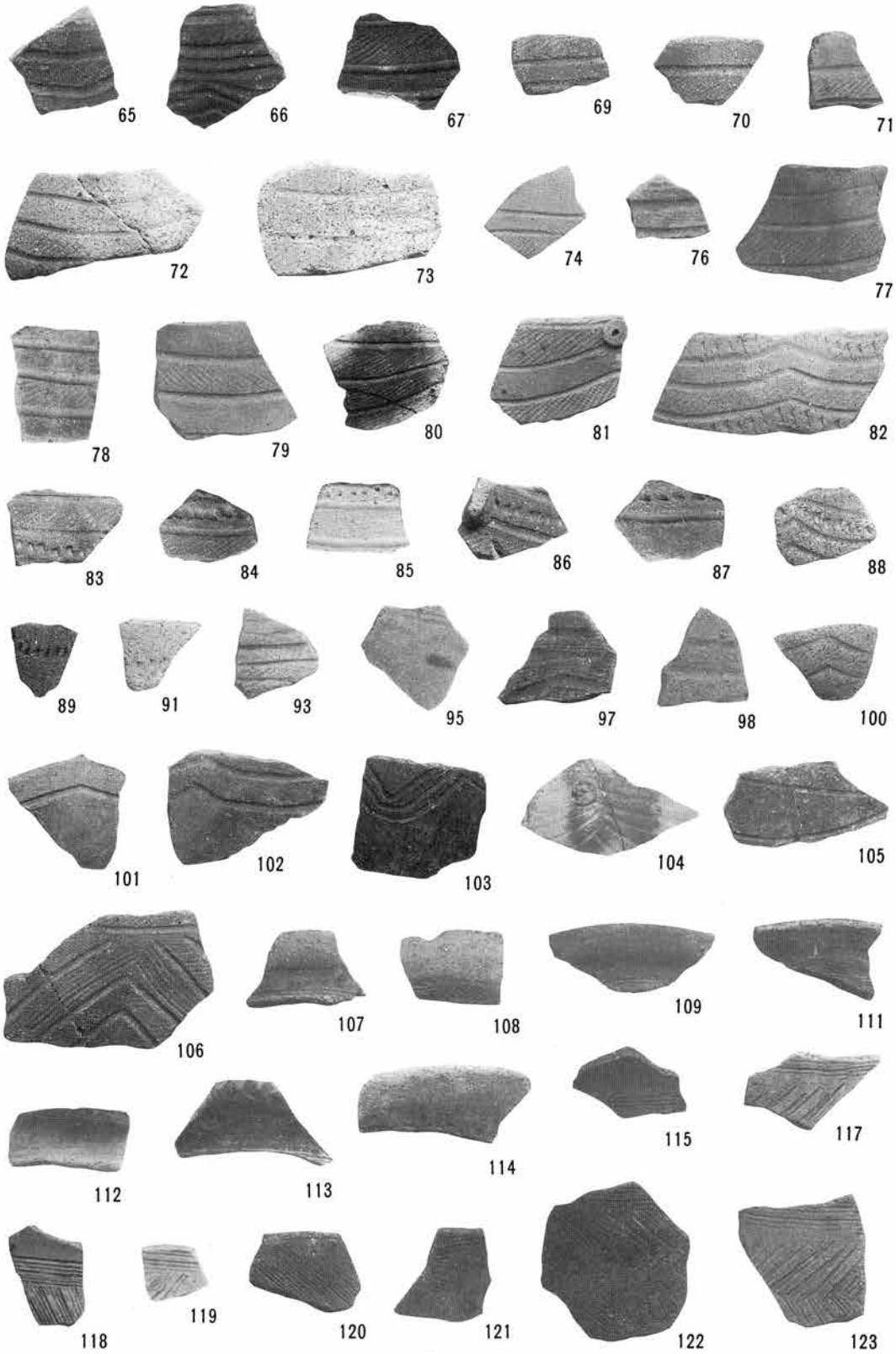
200



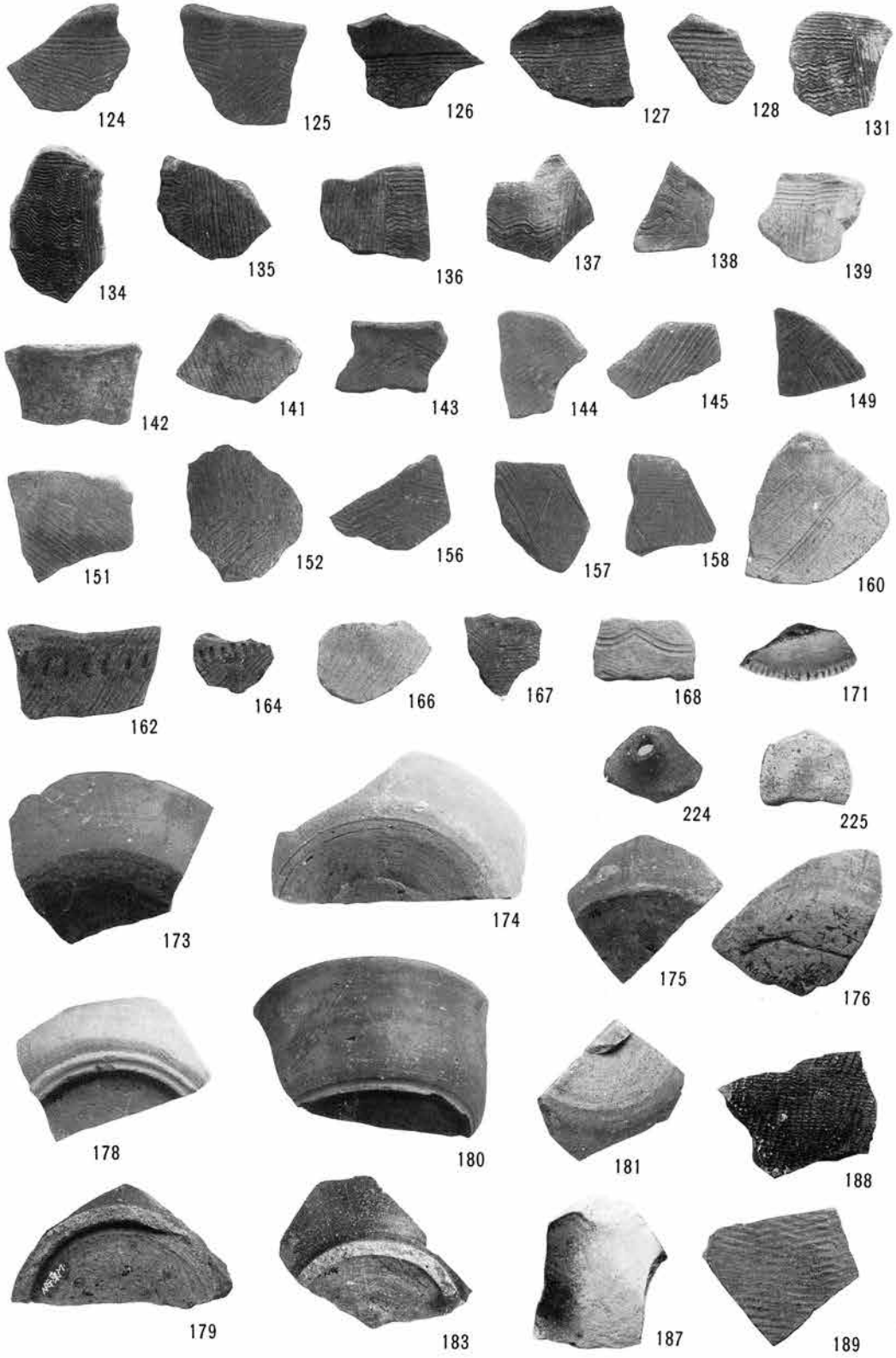
出土遺物（縄文・弥生土器・土師器・須恵器）



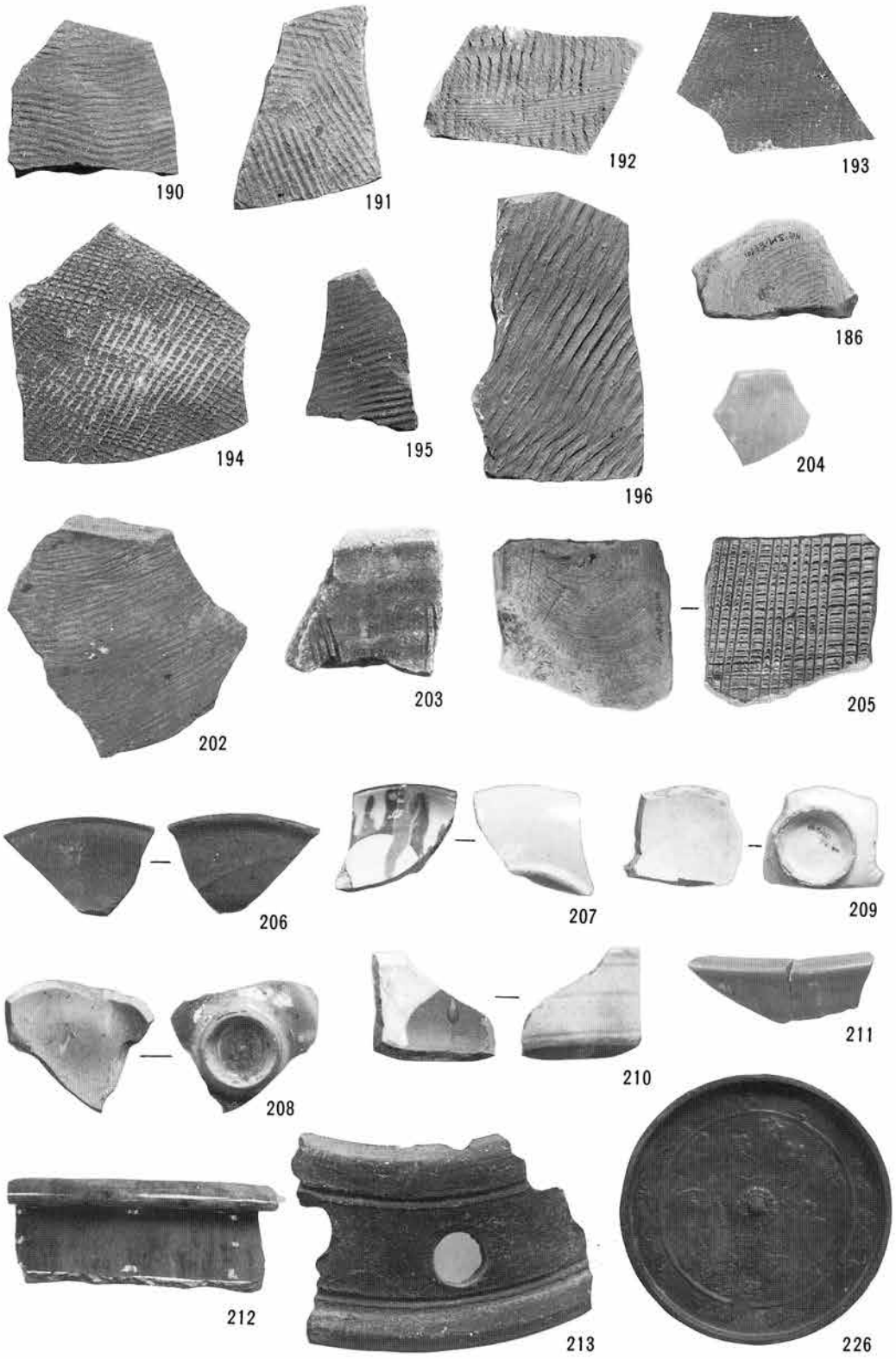
出土遺物（縄文土器・弥生土器）


65
66
67
69
70
71
72
73
74
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
91
93
95
97
98
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
111
112
113
114
115
117
118
119
120
121
122
123

出土遺物（弥生土器）



出土遺物（弥生土器・須恵器）



出土遺物（須恵器、中近世陶磁器他）

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第43

関越自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

長　表　遺　跡

昭和61年３月20日　印刷
昭和61年３月31日　発行

発　行　　新潟県教育委員会
印　刷　　長谷川印刷

長表遺跡正誤表

頁	行	誤	正
2	12	山地西側斜面よりも短かい。	山地西側斜面よりも短い。
4	22	跡ある。	跡である。
9	27	低面に接すかもしくは	低面に接するかもしくは
12	19	洪水埋積層出土。	洪水堆積層出土。
16	5	105	104
18	5	整・内面は黒色処理される。	整。内面は黒色処理される。
19	第14図中	（遺物番号175番は欠番）	
22	22	古い時期にさか上る可能性	古い時期にさかのぼる可能性
26	表2	39｜伊藤家蔵品｜　｜（青海町外波）	39｜伊藤家蔵品｜？｜（青海町外波）
図版9		175	176
図版9		176	177